

---

# 赤ワインと林檎のレアチーズケーキ

仲村 歩

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

赤ワインと林檎のレアチーズケーキ

### 【Nコード】

N5981T

### 【作者名】

仲村 歩

### 【あらすじ】

全てにおいて交わるはずのない2人が出会った。同じことを願い、別れが訪れる。

## 鉛色

鉛色の空が広がっていた。

眼下には街が広がり、その先には蒼い海がどこまでも続いている。

「ここはどこだ？」

見渡してもここがどこなのか判らなかつた。

冷たい北風が背中から吹き抜けていく。

ザワザワと背の高い葦のような草が生い茂り。

真綿で出来たような、亜麻色と言えば良いのだろうか。

背の高い草から穂が出ていて北風に揺れている。

その先には田んぼだろうか、畦で囲まれていて水が溜まっている。

恐らく稲を刈った後に水が溜まったのだろうか。

眼下の畑と田の間の細い道で数人の女の子が言い争っている。

どこかの高校の生徒なのだろう一人は道にしゃがみ込み、その周りで数人が騒いでいる。

騒いでいるというより、一方的にしゃがみ込んでいる女の子に罵声を浴びせて鞆の中の物を道にぶちまけていた。

「俺には関係ない……」

そう思った瞬間、どこからなんとも言えない様な香りがする。

思わず喉が鳴った。

自分でもはっとして我に返る、未だにこの感覚が残っているのかと振り返り、この高台の公園まで来たときの車に乗り込み車を出した。なぜか彼女の事が気になり始めていた。

## 彼女

いつもと同じ繰り返し。

ただ、毎日繰り返し返される、イジメと嫌がらせ。

そして、今日はいつになく執拗に帰り道で待ち伏せされた。

「ほらほら、ぼさっと突っ立ってるんじゃないやねえよ！」

「もう2度と、学校に来るなって行っただろう！」

髪の毛を鷲掴みにして振り回される。

それでも私は声を上げなかった、自分が声を上げれば彼女達が楽し

そうに笑うのを知っているから。

自分では何も出来ないのを知っている。

自ら命を絶つことさえ……

それは約束だから……

全てを受け入れるしかないのだ、どんなに傷ついてもどんなに辛くても。

道端に振り回されて投げ捨てられる。

「つまんねえなあ、少しは抵抗しろよ！」

「あははは！」

「月曜まで会えないからな」

そんな事を言いながら彼女達は私の鞆の中をぶちまけた。

教科書やノートが散らばり筆箱の中からシャーペンや消しゴムが飛び出した。

「金だせよ、有り金全部だ！」

「今日は持ってない」

「そんな筈ねえだろ！ 舐めんな」

そう言っただけで蹴り飛ばされた。

私が体を起こすと直ぐにスカートのポケットに手を突っ込まれた。

「何だ？ マジでねえじゃねえか」

「もう、帰ろうよ」

「ちよい待ち、良い事思いついた」  
彼女はポケットに入っていた家の鍵を取り出すと笑いながら水が溜まっている田んぼに向って鍵を投げた。  
鍵に付いていたキーホルダーが少しだけ光ってチャポンという音と共に田んぼの真ん中に落ちる。

そうか、これさえ我慢すれば……  
そう思った時、少し離れた舗装道路に深緑色の車が止まり男の人がこちらを見て降りてきた。

「やばい！ 逃げろ！」  
彼女達は車が止まった方向と逆の方向に走り出した。  
やっと終わった、そう思うと体に痛みを覚える。

擦り剥いているであろう足や蹴られた肩が痛み出した。  
そんな事を考えていると男の足音が確実に私に向かって来るのを感じる。

少しだけ見上げると、その男の人は私の横に立って私を見下ろしていた。

とても哀しそうな冷たい視線で。

でも、不思議な事に怖くは無かった。

恐怖心よりも何か温かいモノを感じたと言う方が正しいのかもしれない。

初めて出会ったのにそんな感じがして体が少し熱くなり俯いてしまった。

すると、その男の人は私の教科書やノート、それにばらばらに散らばったシャーペンや消しゴムを筆箱に入れて、落ちている鞆に綺麗に入れてくれた。

何も出来ない自分が恥ずかしくって立ち上がれないで居ると、いきなり後ろから脇の下に手を入れられて男の人に立たせてもらった。

あまりに恥ずかしく俯いている自分の顔がカツと熱くなり赤くなっているのが判った。

そんな事を気にしないかのようにその男の人は制服に付いた土ぼこりを手で払ってくれた。

「あ、ありがとうございます。もう大丈夫ですから」

「そうか、それじゃ」

あまり、抑揚の無い冷たい声が聞こえたとたん、私の頭に男の人の大きな掌が降りて優しくポンポンと軽く叩いた。次の瞬間、自分の頬を温かい物が伝うのを感じる。

『あれ？　なんで？』

今まで一度も感じた事の無い感覚だった。

今までだって誰かに助けてもらった事はある、でもこんな事は一度もなかった。

体の中から湧き上がる感情、止め処もなく涙が零れる。

哀しい訳じゃない、嬉しい訳じゃない。

そう不思議な安堵感。

手でいくら涙を拭いても涙はあふれ続けて、両手で顔を覆ったままその場にしゃがみ込んでしまった。

すると何か温かいものが私を覆った。

どの位、泣き続けていたのだろう。

落ち着いて自分の状況がわかると心臓が止まる思いがした。

見知らぬ男の人が私の側に座って私の事を優しく抱きしめていたのだから。

「大丈夫か？　家まで送るから」

抑揚の無い冷たい声がして、私は抱き起こされた。

「だ、大丈夫ですから」

「そう言っただけ泣き出したのは誰だ？」

「すみませんでした」

私はそれ以上何も居えずに俯いたままで居た。

「怒っているわけじゃないから、そんな風に聞こえたのならすまない」

「え？」

再び私の頭を大きな掌が撫でた。

「でも、家の鍵が……」

私が目の前の水が張っている田んぼを見つめると、不意に隣にいた男の人が農道の路肩を蹴り出した。

それはまるで幻想の様だった。

路肩を蹴り出した男の人は水の上を軽やかに歩いていった。

つま先が水面に付くたびに、同心円の水の文様が次々に広がっていく。

そして、田んぼの中ほどまで歩くと徐に腰を屈めて水の中に手を入れて鍵を拾い上げると私に向かい歩き出す。

「これで、いいかな？」

私の目の前にキーホルダーに付いた鍵を摘むように差し出した。

そこでハツとして我に返り男の人の顔を始めてみた。

漆黒の様な少し長めの髪の毛に切れ長の目、瞳は赤黒いと言えば良いだらうか不思議な色をしていて、端正な少し日本人離れた顔つきだった。

私が鍵を受け取ると、男の人は私の鞆を肩に引っ掛けるように持って歩き出した。

「あつ、待ってください」

そう言っ私は男の人の黒ずくめの背中を追いかけた。

黒いダウンジャケットの襟元からは黒いパーカーのフードが出ていて黒いジーンズに黒いハイカットのスニーカーを履いて、背は180センチ位だろうか。

小柄な私にしてみれば大男に見える。

ふっと疑問が浮かぶ、この人は人間なのだろうかと……





## 家

なぜか俺は彼女の自宅のリビングのソファに座っていた。

彼女の道案内で彼女の自宅前まで来ると彼女にガレージに車を入れるように言われた。

「車をガレージに入れてください」

「いや、俺はここで失礼する」

「少しだけでいいからお礼をさせてください。せめてお茶だけでもあまりにも必死に言われて断るのに断れなくなってしまった。

それでも、俺には確信があった。

彼女も、俺の正体を知れば恐れをなして逃げ出すか俺を追い出そうとするだろうと。

彼女は制服のままキッチンに居た。

しばらくすると彼女がトレーを持って現れ、俺の前にティーカップを置いた。

「あのう、コーヒーの方が良かったですか？」

「いや、紅茶で構わない」

俺の顔を伺うように恐る恐る俺に聞いてきた。

俺がカップに口をつけると安心したのか俺の前に腰を下ろした。

「この紅茶は……」

「えっ？」

「ダージリンのセカンドフラッシュ」

「わ、判るんですか？ 祖母が紅茶にはうるさくって」

「まあ、な」

彼女の嬉しそうな顔を見て胸に突き刺さる感情を感じて冷たい返事をしてしまった。

その瞬間、彼女の表情が強張った。

「わ、私。姫宮ひめみやしく 震ふるって言います。助けてくれてありがとう御座い

ました」

急に立ち上がり慌てふためいて自己紹介と礼を言ってきた。表情を変えずに冷たい視線で見ると、事しか出来なかった。

「あのう、お名前を聞いて良いでしょうか？ 祖母に助けをいたした事を伝えないと私が怒られてしまうので」

「……ハルトマンだ」

「ハルトマンさん？」

「ハルトと呼んでくれて構わない」

「ハルトさんですね、判りました」

彼女の家は周りの家と比べても少し大きな屋敷だった。

その割には彼女以外の匂いがしなかった。

俺には関係ないことだが当たり前障りの無い会話を少しだけして立ち去ろうと思っていた。

「君は学生さんだよな」

「はい、私は水乃瀬高校の2年生です」

「高校生？」

思わず聞き返してしまった。どう見ても彼女が高校生には見えなかったのだ。

とても小柄で癖のある栗色の髪の毛、その前髪の間から時々見える瞳は幼い少女そのものだった。

俺が何となくカップから彼女に視線を向けると、彼女は核心を突いてきた。

「ハルトさんは、その人間なんですか？」

当然、疑問に思うだろう、俺は人間では出来ない事を彼女の目の前でしたのだから。

「君には俺が何に見える？」

「私には少し怖そうだけど優しい人にしか見えません」

「俺は、人間じゃない。真祖、つまりオリジナルのヴァンパイアだ」

「へえ？ 吸血鬼さん？」

彼女が間の抜けたポカンとした表情をしている。

「でも、まだ夜じゃないのに？」

「それは、個々の体質によるものだ」

「それじゃ、私の血も吸うの？」

「そんな事をすればお前も吸血鬼になっちゃおう」

「それじゃ十字架！」

彼女がふざけながら胸元からロザリオを取り出した。

「それも俗説だ、もちろんニンニクもな」

「それじゃ、質問を変えます。歳を教えてください」

「400年以上生きてきたから、歳を教えろと言われても困る」

「それじゃ、私の見た目で27歳と言う事で」

「まあ、当たらずとも遠からずだな。ヴァンプになった時はそのくらいだったからな」

段々、馬鹿らしくなってきた。

この子は何者なんだ？

人間ではないと言っているのに怖がらずに質問を浴びせてくる。

こんな人間は初めてだった。

「君は俺の事が怖くないのか？」

「私、怖い物なんてありませんから……」

彼女の目が瞬時にあの時と同じ目になった。

同じ高校の生徒に苛められている時の目だ。

何事にも決して動じない深い哀しみの目。

まるで死を待ち望んでいるかのような冷たい目。

この目が俺の心に留まり、俺は彼女に近づいた。

俺と同じ目をした一人の幼く見える彼女が気になった。

そして彼女の香り、懐かしいような不思議な香りがこの家からはしっていた。

「君の家族は？」

「私、独りだけです。父も母も幼い頃に事故で亡くなりました」  
考える事をやめて仕方なく彼女に質問してみた。

あまり、話したくない事なのだろう。  
当たり前と言えば当たり前前の事だった。それでもぼつぼつと少しづつ話をしてくれた。

実際の所、両親の死が本当に事故なのかは分からない事、幼い時の事で祖母が教えてくれた事が全てだという事。

そして中学までは祖母の家に居て高校になってから両親と暮らしていたこの家に独り暮らしを始めた事。

祖母が時々様子を見に来てくれる事などを。

そんな事を話している間に外は帳が下りて剣のような細い月が出ていた。

「それじゃ、俺はこれで邪魔をする」

「これから、どこに？」

「どこかに寢座を探す」

「寒くないですか？」

「俺は人間じゃ無いと言ったはずだ」

そう言つて玄関のドアを開けようとする時彼女が俺のダウンジャケットの裾を掴んだ。

「離しなさい」

「嫌だ……」

「俺は人と一緒に居るべきじゃないんだ」

「それでも嫌！」

振り返らずにそんな押し問答を繰り返す。

後ろを見ずに彼女の手を払いのけて外に出ようとした時、俺の背中に小さな彼女の体が見付いて来た。

「ハルトさんが人間じゃなくても、他の人から見れば怖い吸血鬼でもいいから一緒に居て下さい！一緒に居られる間だけでいいから、お願いします」

「無理だ、君と俺では住む世界が違う」

「それなら、私を吸血鬼にしてください！」

「それは出来ない」

「それでも……一緒に……お願い……だから……」

彼女が俺の足元に崩れ落ちて泣いている。

俺は大きな溜息をついた。

そして何故その時、俺があんな事を言ったのか理解できなかった。

誰とも係わる事をやめた俺が。

「いつまで一緒に居られるか判らない、それで良いのなら一緒にいてやる」

何故、あんな事を言ってしまったのだろう。

初対面で、そして人間でない彼に……

あれから私が作った料理を食べて。

あの人は今、バスルームにいる。

「美味しいって言うてくれなかったなあ……」

リビングのソファーに座りそんな事を考えていた。

彼の事を怖くないと言えば嘘になる、でもそれ以上に強く感じる物があった。

言葉では上手く言い表せない、匂いと言えば良いのかなあ。私と似ている匂いがする気がした。

しばらく、頭の中でグルグルと思いを巡らせてみるが答えなど出てくるはずがなかった。

すると彼がバスルームから出てきた。

「お、お湯加減はどうでしたか？」

「丁度、良いな」

「そ、そうですか」

会話が續かない、それもその筈だとその時思った。

私は殆ど男の人と話をした事がない、学校でもごく親しい友達としか話をしない。

その少ない友達でさえ女の子だ。

仕方なく、立ち上がり薬箱を持って来てソファーに座り、中から消毒液と脱脂綿、ピンセットを取り出し膝の擦り傷を消毒しようとする。すると彼に止められた。

「風呂場で、傷口を綺麗に洗ったのだろう」

「は、はい」

「それなら、消毒は必要ない。むしろ消毒はしてはいけない」

「何ですか？」

「人間の体は無菌ではないからだ、そして人の体の菌は決して害は無いむしろ有益なのだ」

「でも」

「それに傷を修復しようとする細胞を傷つけてしまう事にもなる」  
「それじゃどうしたら」

今までの常識をひっくり返された気になって戸惑ってしまった。それに相変わらずな抑揚の無い冷たいような喋り方。まるで怒られているみたいに感じて俯いてしまった。

「傷口を乾燥させない様にしてあげれば治りが早い。ラップでも巻いて包帯でもしておけばいい」

そんな事を言われてキッチンにあるラップを取りに行こうと立ち上がると、テーブルに怪我をしている膝小僧をぶつけてしまった。

「痛い……」

膝小僧を見ると血が滲み出していた。

するとテーブルの向こうから大きな溜息が聞こえたかと思うと、彼が立ち上がりテーブルを少しずらして私の前にしゃがみ込んだ。

「な、何をするんですか？ まさか……」

私の頭の中はプチパニックになった。

彼は吸血鬼、そして彼の目の前には私の血が、心臓が飛び出しそうなくらい鼓動が高鳴る。

すると彼は自分の親指の先を口に含み、直ぐに握りこぶしの中に親指を入れて私の膝小僧に優しく掌を当てた。

すると不思議な事にズスキと痛んでいたのがスーと引いていく。彼が掌を離すと擦り傷が綺麗に消えていた。

「え？ どうして」

私が戸惑っていると彼は同じ様に足にある傷に掌を当てていく、見る見るうちに足の傷が綺麗に消えた。

そしていきなり肩を掴まれた。

「嫌！ 離して……」

「動くな、じつとしていろ」

彼の冷たい視線に見つめられて動けなくなる。

彼を見ると私の顔でなく肩に当てた自分の手を見ていた。

不思議に思い肩に当てられた彼の手を見ると親指から血が出ていて私のトレーナーに血が染み込んで赤くなっていた。

「そんなに心配そうな顔をしなくても服は汚れん」

「で、でも」

しばらくすると彼は私の肩から手を離しソファに腰を下ろした。

「少しは楽になったか？」

彼に言われて気が付いた。

彼が手を当てていた肩は蹴られて内出血をして動かす度に痛みが走っていたが、今は痛みを感じなかった。

それに不思議な事に血が染みになっていいるであろうトレーナーには血なんて何処にも残っていないかった。

「どうして傷が綺麗に……それに、あなたの血は？」

「簡単な事だ、我々は不死身だ。よほどの事が無い限り死ぬ事は無い。そんな我々の血には治癒能力がある。ただそれだけの事だ」

「でも、私の体に血なんて付いていないじゃない」

「俺を何だと思ってる？」

「吸血鬼のハルトさん」

顔を上げると彼は哀れむモノを見るような目で私を見ていた。

そんな目で見ないで下さい、どうせ私は無知ですよ。

すると彼が私の目の前に親指を突き出してきた。

見ると小さな傷から血が出ている、しかしその血は見る見るうちに蒸発して消えていった。

「あまり酷くない傷ならいくらでも治せる。しかし、ヴァンパイアとして血は有限。使い過ぎれば力が弱まり回復するのに時間がかかる。傷を治したのは食事を作ってくれた礼だ。聞きたい事があれば答えるから今のうちに聞いておけ」

彼がじつと私の顔を見ている。



おそらく質問を待っているのだろう、でもそんなに見られたら言い  
たい事も言えなくなり。

そんな自分が情けなくなってきた。

「聞いておきたい事は無いのか？」

「……………」

「まあ、人には出来ない事は大概出来ると思ってもらっていい」

「か、壁を通り抜けるとか？」

「俺は人ではないが幽霊でもない。ヴァンパイアだ！」

「ご、ごめんなさい」

そんな無表情で強い口調で言われたら凄く怖いです。

それはあなたが吸血鬼だからじゃなく、単純に大人に怒られている  
みたいで。

仕方なく私から聞いてみた。

「私に聞いておきたい事は無いですか？」

彼は少し考えてから口を開いた。

「今日は、何月何日だ？」

「えっ？ 1月16日金曜日ですよ」

「何年だ？」

「西暦ですか？」

「そうだ」

「……………98年です」

彼が少しだけ視線を動かして何かを考えている。

不思議に思った。

なぜ今日の日付を聞くのか、それに西暦まで。

もしかして宇宙人？

そんな筈無いよね吸血鬼だって自分で言っているし私の傷も目の前  
で治してくれた。

「もしかして、ここがどこかも判らないのですか？」

「ああ」

「ここは綾音島あやねじまです」

「アヤネジマ？」

「はい、言葉の綾の綾に、音で綾音島」

「そうか……」

私は自分の耳を疑った。

ハルトさんが笑っている、それも肩を震わせながら。

初めて見た、この人も笑うんだ、人じゃないけれど。

思わず声に出してしまった。

「笑った……」

「学校は週休2日制？」

「はい」

「それじゃ、明日は島の案内と買い物に付き合ってもらえるかな？」

「は、はい！ デートですね？」

「？ まあ、君がそう思うならそう思ってくれて構わないけれど。

俺は人間じゃないよ」

休みの日にどこかに出かけられる。

それだけで嬉しかった。

高校に入ってから休みの日はお婆ちゃんの家に行くか、お婆ちゃん

んがここに来るかで何処にも出かけた事がなかったからとても嬉し

かった。

それに、今のハルトさんの瞳には冷たさの中に優しさが見えた気が

したから、こんなに嬉しかったのかもしれない。

## 夜・2

彼女に今日の日付と年を聞いた時は、正直に笑うしかなかった。有り得ないだろ、400年近く生きてきてこんな事になるなんて。ヴァンパイアの俺がタイムスリップして10年前の世界に居るなんて。

彼女と出会う前の日の深夜。

俺は都心の環状線を車で流していた。

何をするでもなく考え事をしながら、時には何も考えずに独りで車を流すのが好きだった。

俺達のようなオリジナルは遺伝的なものだ、そして最初から吸血鬼として生まれてくるわけではない。

遺伝性の病気の様なものだと言えば良いだろうか、発症した時点で成長が止まる。

歳を取らなくなるのだ。

だから子どもそのままの奴もいれば年配のヴァンパイアも居る。

そして、同族が顔を合わすことは滅多に無い。

しかし、同族でなければかなりの人ではないものが蠢いている。

つまり、この世は人間だけの世界ではないと言う事だ。

しかし、人間の世界に干渉し過ぎないように秩序を保つ必要がある為に掟がありそれを破れば滅されてしまう。

今ではそんな事も昔の話のように語られている。

他の一族も人間の世界に溶け込んで何事も無く過ごしている。

それでも、歳を取らなくなってからは同じ場所に暮らしている訳にもいかずに、それこそ世界中を渡り歩いている。

そう数百年も……

今は日本に居るが前に日本に居た時はもう数十年前も前の事だった。

環状線を車で流していると、いろいろな事が頭に浮かび消えていく。いつの間にか雨が降り出していた。

「雨か……」

その日はやけに子どもの頃の事が頭に浮かんできた。

俺が人として過ごしていた時代の事が。

不思議な事に歳を取らなくなってからの事はあまり覚えていないが、幼かった頃の事は鮮明に覚えていた。

「またか……」

子どもの頃に言われた言葉が心のどこかにいつまでも抜けられない棘の様に突き刺さっていた。

あまり話したことは無かったが顔見知りの女の子に言われた言葉。

俺の全てを拒絶し否定された様な気がした。

そして、その言葉は子どもの頃の俺の何かを粉々に砕いた。

嫌な思いを振り払うように頭を振って、そろそろ帰ろうとすると雨が強く降り出していた。

「もう一周したら帰ろう」

深夜の環状線は車が少なく空いていた。

しかし、今日は週末だった。

法定速度をかなりのオーバースピードで車を走らせている。

そんな俺の車の横を2台の車が走り抜けて行った。

「ルーレット族か？ 頼むから目の前で事故ったりするなよ」

そう思った瞬間、抜きにかかった車のリアが滑り出すのが見える。

「くそつたれが！」

滑り出したリアが側壁に接触しスピンを始める。

何とか立て直そうとしているが濡れた路面、そしてあのスピードでは無意味だった。

不安定な挙動をしている目の前の車を避ける為に、ミラーで後方を確認してからハンドルを切る。

なんとか車をかわす、ホッとする間もなく急カーブが迫っていた。

何とか車の拳動を立て直し、カーブに突っ込むが今度は俺の車のリアが滑り出した。

「な、なんだ？」

フロントガラスの向こうに先行していた筈の車が自爆している。

急カーブを曲がりきれずに単独事故を起こし、その所為で濡れた路面にオイルが流れていたのだ。

車が制御不能になり視界がスローになりコンクリートの壁が目の前に迫ってきた。

「ここまでか」

一瞬だけ閃光に包まれた。

どの位、時間が過ぎたのだろう。

気が付くとハンドルに抱きつくような姿勢で気が付いた。

ライトに照らされて見える目の前にはコンクリートの壁、そしてナトリウム灯のオレンジ色の明かりに包まれているが、ここが環状線ではない事が人目で判った。

決定的に違うのは周りの明るさだった。

「ここは……」

辺りを見渡すとかなり離れた所にナトリウム灯が点在しているが、辺りは暗闇に包まれていた。

車の時計で時間を確認すると夜明けまでにはまだ数時間ある。

車を降りてみると、山の中の様だった。

仕方なく携帯を取り出すディスプレイを見ると圏外の表示が見える。

「どんな田舎なんだ、圏外って」

無闇に動き回る訳にもいかず、かといって車をこのままにしておくわけにも行かない。

少し車を走らせると右手に公園の入り口のような場所があり、そこに車を止めて夜を明かす事にした。

エンジンを切り、シートを倒すと程なくして深い眠りに落ちた。

目を覚まし携帯を見るが圏外のまま、いつに無く眠い。

こんな事は初めてだった。

起き上がることも出来ずに2度寝してしまふ。

次に目を覚ますと、夕方に近い時間になっていた。

溜息をついて外に出る。

鉛色の空が広がっていた。

眼下には街が広がり、その先には蒼い海がどこまでも続いている。

「ここはどこだ？」

高台にある公園の展望台に俺は立っていた。

そして、そこで彼女を見つけ。

今、彼女の自宅に居る。

「両親が使っていた部屋を使ってください」

彼女にそう言われて俺は2階の部屋の大き目のベッドで横になっている。

何も判らない事だらけだが今更考えても仕方が無い、明日になれば少し何とかなるだろう。

そんな事を考えながら、微かに香る懐かしいような彼女の香りに包まれて俺は目を閉じた。

朝、目が覚めて1階のリビングに向くと人の気配がした。  
ハルトさんかな？ そう思い声を掛けた。

「おはよー、早かったんだね」

「栗。随分、早起きだね」

その声には凍りついた。

そこに居たのはハルトさんではなく祖母だった。

「お、お婆ちゃん……」

ソファーにゆつたりと腰掛けて紅茶を飲んでいる。

祖母の姿は優雅と言言葉以外に現しようが無かった。

北欧の血が入るクォーターらしくウェーブした髪の毛は白髪でもなく銀色と言えばいいのだろうか不思議な色をしていた。

彫りの深い顔には人生の皺が刻まれていたが、品のある顔つきだった。

祖母の年齢は良く知らない、何度聞いても『レディーに歳を聞くなんて、マナー違反だよ』の一点張りで教えてくれないのだ。

そんな事より、祖母は礼節を重んじる人で曲がった事が大嫌いな人だった。

それでも、私には優しくしてくれるから私も大好きなのだけ……

「栗、そこに座りなさい」

「は、はい」

いつに無く静かで威厳のある声に気圧されて、祖母の前に座り俯いて祖母の顔を伺う。

「誰か居るのかい？」

「……………」

「ガレージのミニは誰のだい？」

「ミニ？」

「ミニ・クーパーと言うんだよ、あの車の名前だ」

「それは、その……」

どう説明していいのか判らずに押し黙ってしまった。

ここに連れて来たのはお礼のつもりだったけれど、一緒に居て欲しいと言ったのは私だ。

私が連れ込んだと思われても仕方が無いだろう。

でも、吸血鬼なんて言っても信じてはくれないだろう。

それにそんな訳の判らない人を連れ込んだなんて……

「上に居るのだろう。起こして連れてきなさい」

「は、はい。判りました」

祖母に言われて重い腰を上げる。

恐らく朝の散歩の途中で家の前を通りガレージに止めてあったハルトさんの車を見つけて不審に思い、合鍵で家に入り私が起きるのを待っていたのだろう。

溜息をつきながら階段を上がる。

ハルトさんが先に祖母に出くわさなかったのが不幸中の幸いなものかもしれない、そんな事を考えながら私はハルトさんが寝ている両親が使っていた部屋に向った。

ハルトさんを起こして二人でリビンググに向う。

私の鼓動は乱れたままだった。

そして、私は目を疑った……



「ハルトさん！ 起きてください！」

「ハルトマンさん！」

遠くで俺を呼ぶ声が聞こえて、体を揺らされる。

あの懐かしいような香りに包まれていた。

目を開けるとそこには、慌てている彼女の顔が見えた。

大きく伸びをして、枕元に置いてあった携帯で時間を確認するとまだ早朝と言ってもいい様な時間だった。

「こんなに早く出かけるのか？」

「お、お婆ちゃんか……」

「死んだのか？」

「死んでません！ 勝手に殺さないで下さい」

彼女の幼い目が真剣な眼差しで怒っていた。

「婆さんにはれたんだな、俺を家に泊めたのを」

「は、はい」

そう言うと彼女は俯いてしまい、不安そうに視線が揺れていた。

仕方が無い、俺が悪者になればいいだけの事だ。

起き上がりジーンズを穿こうとすると彼女が真っ赤になり部屋を飛び出した。

シャツとボクサーパンツで寝ていた俺はとりあえずジーンズを穿いただけで部屋を出る。

ドアの側で彼女が真っ赤になって俯いていた。

「リビングに居るのだな」

返事は無くただ、彼女が小さく頷いた。

廊下の先にある階段を下りると、紅茶のいい香りと彼女に似た懐かしいような香りがしてきた。

リビングに目をやると彼女の祖母がこちらを見た。

「<sup>みぞれ</sup>霰……」

思わず息を呑んだ、そして止まりかけた思考を何とか動かす。どんなに思考を巡らせても俺に出来る事はただ1つしか無かった。彼女の祖母の前に跪いて手を取り手の甲に軽く口付けをした。

後ろで彼女が大きく息を吸込んで驚きのあまり声も出さず立ち尽くしているのが判ったが、今はそんな事より何故もつと早く気付かなかつたのかと後悔の念が先にたつた。

「珍しい処で珍しい者に会うものね。ハルトマン・月城・シュヴァリエ」

俺は何も答えず頭を下げたままだった。

「詳細は今夜で構わないわ。私の屋敷に一人で来なさい。場所は霰に聞いてね」

俺は何も言わずにただ頷いた。

「霰、ここに座りなさい。霰！」

「は、はい」

彼女が祖母に呼ばれて祖母の横に腰掛けた。

顔を見ると何が起きたのか判らず不安に駆られ瞳が揺れている。

「ロザリオを出しなさい」

そう言われて彼女が首に掛けてあるロザリオを祖母の霰に渡した。すると今度は霰が自分の首に掛けてあったロザリオを取り出した。

「お婆ちゃん、それはお婆ちゃんのお姉さんの形見のロザリオ」

「今日からは霰が持っていなさい」

「えっ、でもこれは」

そのロザリオにはピジョンブラッドのルビーが真ん中に埋め込まれていた。

「前から不思議に思ったのだけれど私達はカトリックでもないのに……」

彼女がそう言うと霰が彼女の口に人差し指を当てた。

「形見と言ったはずよ、訳は追って霰には教えるからね」

「う、うん」

そして彼女は霧に言われるままロザリオを持ってルビーを上に向けた。

「それじゃ、仮契約をお願いね。ハル」

そう言つて霧は辺りを見回した。

「必要ない」

それだけ言つて俺は霧が持っているロザリオを掴み右手で強く握り締めた。

すると、ロザリオが掌に喰い込み血が滴る。

その血を彼女の持つているロザリオのルビーに落とすと一瞬だけルビーが光り輝いた。

「盟約のままに」

そう告げて立ち上がるうとすると霧に手を掴まれた。

「あなたと言う人は相変わらずなのね。雫、救急箱を」

「えっ、は、はい」

彼女が昨夜の救急箱を慌てて持つてくると霧が傷の手当てをしている。

それを彼女が不思議そうな顔で見ている。

「お婆ちゃん、ハルトさんはそんな事しなくても」

「雫はハルの正体を知っているのね。それなのに何故ここに？」

「俺が彼女を脅して居座つたのだ。彼女は何も悪くない」

俺が口を挿むと霧が彼女と俺の顔を訝しげに見比べていた。

沈黙が流れる、すると霧が溜息をついた。

「そう言うことにはしておきましょう」

「お婆ちゃん？」

彼女が不思議そうに声を上げた。

「怒ったりはしません、安心なさい。でも事後報告はいけません、判るわね雫」

「ゴメンなさい」

「でも、ハルで安心したわ。彼ならあなたを守ってくれるでしょう」「お婆ちゃん？」

また彼女が不思議そうに声を上げた。

「雫はまだ何かあるの？」

「その、ハルトさんの手は……」

「この傷は簡単に治らないわよ。馬鹿みたいに銀で傷を付けたりするから。この人の体は銀で傷をつけると治りが遅いのよ」

「本当に、大馬鹿なんだから……」

未だにこの人は俺の事を人間だと言ってくれるのか、そんな事を考えて居ると不意に震に抱きしめられた。

いきなりハルトさんがお婆ちゃんの前に跪き手の甲にキスをするのを見て驚いて。

頭の中がパニック状態になっちゃった。

お婆ちゃんとハルトさんが知り合い？

それにお婆ちゃんはハルトさんのフルネームを知っていたのもびっくり。

確かハートマン・月城・シュヴァリエだっけ、あれ？ 月城って確か……

それと仮契約って何？

盟約って何の事？

それでそんでお婆ちゃんがハルトさんの事を抱きしめて泣き始めて、私はオロオロするしか出来なかったの。

そして今は、ハルトさんがキッチンに立って朝食の準備をしているのを、私とお婆ちゃんはリビングのソファで待っていた。

「お婆ちゃんが急にフレンチトーストが食べたいなんて言うから私驚いちゃった」

「雫は相変わらずだね、他に驚く事があるんじゃないの？」

「だ、だって何から聞いたら良いのか判らないんだもん」

「ハルト私は古い友人なんだよ、ハルトは変わらないままで私は皺くちゃのお婆ちゃんになってしまったけれどね」

「それじゃ、お婆ちゃんのお姉さんもハルトさんの事知っていたの？」

「そりゃそうだよ、あの頃は3人でよく遊んだものさ。昔、昔のことだけどね」

しばらくするとリビングにいい匂いが立ち込め始めていた。

するとハルトさんがフレンチトーストとティーポットを運んできて

くれた。

目の前にはメイプルシロップがたっぷりかかった黄金色のフレンチトーストが湯気を上げていて、ハルトさんがカップに紅茶を入れてくれた。

「うわあ！ 美味しそう！ いただきまーす」

ハルトさんのフレンチトーストは表面がカリカリで中はしっとりしていて今まで食べた事の無いフレンチトーストだった。

「凄く、美味しい。それにこの紅茶、お婆ちゃんが入れたみたいに美味しいし香りが凄い立っているよ」

「当然だよ、紅茶の入れ方はハルから教わったのだからね」

「えっ？ ハルトさんに教わったの？」

「そうだよ、ハルは世界を渡り歩いているからね」

ハルトさんを見ると何も言わずに黙々とフォークとナイフでフレンチトーストを食べている。

そう言えばお婆ちゃんに会ってから殆ど何も喋らないのに気が付いた。

「どうしたんだい、雫？」

「べ、別になんでもないよ」

な、なんで私がハルトさんの顔を見ているときに声を掛けてくるかなあ。

驚いてしどろもどろになっちゃったじゃん。

出会ってから抑揚の無い声であり喋らない人だったけれど余計に大人しくなっちゃったっていうか静かになってしまっただけなのかなあって思っただけなのに。

「ハルの事が気になるのかい？」

「ち、違うよ。だって住む世界が違っちゃって言われたし」

「同じ世界で生きていりゃ変らないじゃないか？」

「それは、そうだけど……」

ハルトさんが気になって上手く喋れない、何でこんなにドキドキするんだろう。

それにお婆ちゃんがなんだか私の事を煽っているような感じがする  
のもどこか引つかかっていた。

朝食を済ませるとお婆ちゃんはハルトさんに何かを渡して自分の屋  
敷に帰ってしまった。

なんだか二人の間に気まずい雰囲気が流れて、時計を見ると11時  
を指していた。

これからどうしようか、そんな事を考えていると抑揚の無い声が聞  
こえた。

「そろそろ、出掛けたいのだが」

「えっ？ うん、判った。私はいつでもいいよ」

そう返事をする、ハルトさんが少し不思議そうな顔をして私を見  
ていた。

「ハルトさん、なんですか？ なにか変ですか？」

「いや、その格好で出かけるのか？」

質問を質問で返された、『その格好』って言われても私の普段着は  
大抵こんな感じなのに。

ニットのワンピースにレギンスを穿いていて、この上に寒ければパ  
ーカーを着れば問題ないと思うんだけど。

確かに女の子としては地味な色の取り合わせかもしれない。

でも、私はそんなにカラフルな服を持っていなかった。

目立たないように地味な女の子の子であるために。

ハルトさんの車に乗って出かける。

初めて乗った時は気付かなかったけれど彼の深緑色の車は小さくっ  
て可愛らしい形だった。

始めに洋服を買いに行く、何処に連れて行こうか迷ったけれど街中  
を案内しながら買い物する事に決めた。

でも、それは後悔の始まりだった。

車を有料駐車場に止めて街中をぶらつく、歩道を歩いているとすれ

違う人が皆振り返って私達を見ていた。

私達と言うよりハルトさんを見ているのだろう。

一言で言えば恥ずかしい。

そう恥ずかしいこの上ないのだ。

ハルトさんは身長が高く、体つきは少し華奢なだけけれども漆黒の様な少し長めの髪。

そして切れ長の目、端正な日本人離れた顔つき。

その後ろをチンチクリンの私がチヨロチヨロとついて回っている。

なんだか私が笑われているみたいで恥ずかしくなり俯いて歩いていた。

「ふぎゆうー！」

素っ頓狂な声を上げて何かにぶつかって後ろに数歩よろめいて尻餅をついた。

「痛い！」

「下ばかり向いて歩いているからだ」

頭の上から抑揚の無い声が聞こえる。

「ハルトさんが目立ちすぎるんです。なんだか私、恥ずかしくって」

「姫だつて、ちゃんとすれば可愛らしいのに」

「姫？」

「雫と呼んだ方が良くいかな？」

ハルトさんにいきなりそんな言い方されて、魂が抜けたように宙を見ていたらいきなりハルトさんの顔が近づいてきた。

「へっ？」

考える間もなくハルトさんは小さい子どもを立たせるように私の脇に手を入れて私を立たせた。

「そんな所にいつまでも座っていたら邪魔だろ、行くぞ」

後ろを振り向くと数人の女の人が立ち止まっていた。

「す、すいませんでした」

慌てて私が頭を下げると女の人は私の後ろを見蕩れてポーとしている。



不思議に思つて後ろを振り向くと見た事もない様な微笑でハルトさんが頭を下げていた。  
な、なんなんだろうあの微笑、私には一度もあんな微笑を向けてくれた事は無い。

ハルトさんが笑つたのを見たのは、昨日の夜に私に月日とここが何処かを聞いてきたあの時だけだった。

でも、その時の雰囲気と違うものを感じた。

気のせいだよね……

買い物済ませて、島の中をハルトさんの車で周る。

私が助手席でナビをするんだけど、慣れないからから行ったり来たりしていた。

「ゴメンなさい、私の所為で……」

「姫が悪いわけじゃないだろ、ただ不慣れなだけだ」

相変わらず私には無表情で抑揚の無い声で喋る、そしていつの間にか姫と呼ばれるようになってしまった。

なってしまったと言うのは雫と呼ばれると私が真っ赤になってしまっから。

それは仕方が無いことだと自分に言い聞かせた、17年間生きてきて一度も男の人から名前と呼ばれた事が無いのだから……

『不慣れか』なんだか凹むな、私はここで生まれてここで育ったのに何で私はこんななんだろう自己嫌悪に陥り窓の外に視線を移した。赤信号で車が止まって、ぼんやりと外を見ていた私の視線に黒塗りの車が目に入り横に止まった。

視線を上げると横に止まった車の後部座席から視線を感じる。

そちらを見て私は慌てて視線を外して前を向き俯いた。

「華保……」

体が硬直してスカートの裾を握り締めていた。

ハルトさんに不審がられる、そんな事が一瞬頭の中を過ぎるけど体は正直だった。

「どうした、慌てて」

「な、なんでもないです」

「昨日、姫を苛めていた同級生でも居たのか？」

そう言われた瞬間、ビクンと体が反応してしまった。

馬鹿正直な自分の体にだんだん自分が情けなくなってきたってしまっ

涙が零れそうになるのを必死に堪えた。  
しばらく、俯いていたけれどハルトさんは何も言わなかった。

どこをどう走っていたのかさえ判らないくらい私の頭の中は真っ白になっていた。

小学校の中学年から始まったイジメと嫌がらせ、それは中学、高校になると更に酷くなった。

理由なんか判らなかつた、理由なんか無いのかも知れない。  
でも耐える事しか私には出来なかつた。

幼い頃の約束だから。

決してどこにも行かないと言う祖母と交わした約束。

それは私が幼い時の記憶……

ある日、両親が出掛けたまま帰らなかつた。

そして数日後、祖母に連れられて行った先は葬儀場だった。

祭壇には両親の写真があり大勢の人が居た。

幼かつた私は何が起こっているのか判らなかつた。

ただ、父と母が事故で死んだと言われ。

そして祖母が私を抱きしめて泣いていた。

「もう、こんな哀しい別れはしたくない。どこにも行かないから  
もどこにも行かないでくれ」

「うん、お婆ちゃんが泣くような事しないよ、雫はどこにもいかな  
いからね」

そんな幼い頃の約束、でも決して破る事は出来ない。

祖母は私をここまで育ててくれた。

それでも心が壊れそうだった。

執拗に繰り返されるイジメと嫌がらせ逃げる事も出来ず、周りは見  
てみない振りをする。

大人でさえ助けってくれなかつた。

祖母には知られないように隠し通して来た。

そして、私のたった一つの願い。  
逃げ出すが出来ないのなら消えたい、でも自らそれを下す事は出来ない。

祖母との約束だから、たった一人の血の繋がった家族との約束だから。

「ここが姫の学校か？」

そう言われて慌てて窓の外を見るとそこは私立水乃瀬高校の校門の前だった。

「えっ、は、はい」

驚いて返事をするハルトさんは校門の前に車を止めて車から降りて門に向かい歩き出していた。

私も車から降りて歩き出そうとするとハルトさんが手を少し前に出して、何かを触ろうとしながら歩いているのが見える。

「何かあるんですか？」

「いや、なんでもない。ちょっと……」

ハルトさんは手を下ろして学校の敷地に入っていく。

その時、私を呼ぶ声がした。

「雫！ どうしたの？ 雫が週末学校なんて珍しいじゃん」

「あ、雪乃ちゃん」

手を振りながら学校指定のジャージで走ってくるツインテールの小柄な女の子、雪乃ちゃんだった。

雪乃ちゃんは私が学校で仲良くしている数少ない友達の一人だった。

「えへへ、ちよつとね」

私が愛想笑いをすると雪乃ちゃんがハルトさんに気が付いた。

「し、雫。こ、この人は……」

「あう……その……」

な、なんて説明すればいいんだろう、吸血鬼？ ヴァンパイアは同じ意味か。

雪乃ちゃんが恐る恐るハルトさんの顔を見上げている、そしてハル

トさんは雪乃ちゃんと私を見下ろしていた。

「姫の婆さんの親戚だ。つまり姫の親戚と言う事になるかな」

「姫？」

ハルトさんの説明に雪乃ちゃんが不思議そうに返事をした。

「姫宮だから姫、何か可笑しいかな？」

「わ、私、氷室雪乃ひむろゆきのつて言います」

「姫の友達なのだな、これからも宜しくな」

そう言いながらハルトさんが見た事も無い優しい笑顔で雪乃ちゃんの頭を撫でた。

「えへへ、なんだか嬉しいな」

な、なんなの？

私にはあんなに優しくそんな笑顔をしてくれた事無いのに。どうして？

そんな事を考えていると雪乃ちゃんが私の耳元で囁いた。

「優しくそんな人だね。雫の大切な人？」

プシューウ　圧力鍋から水蒸気が噴出すような音がする。

真つ赤になって俯いて首を横に振るのが精一杯だった。

「彼なら雫を守ってくれるはずだよ」

雪乃ちゃんのとどめの台詞で私は腰が抜けてその場にしゃがみ込んでしまった。

そんな私を見て笑いながら雪乃ちゃんが走って行き振り返る。

「お兄さん、雫を宜しくね」

そんな声が聞こえると雪乃ちゃんの姿は校舎に消えていた。

「和洋折衷のカオスだなまるで」

ハルトさんの言葉はよく聞き取れなかった。

何て言っただらろう？不意に体を起こされる、ハルトさんが私を立ち上がらせたのだ。

初めて出会った時の様に。

そして夕食の買い物をしてお婆ちゃんの家に向った。



俺は雫の祖母、つまり霰に睨まれて両手を上げて降参の意思表示をしていた。

そして、俺の背中には一筋の冷たいものが……

「霰の家からは遠いのか？」

「近くですよ、お婆ちゃんが散歩しながら寄れるくらい」

「それならば、悪いが1人で先に帰っていきなれ」

「……」

俺の言葉に対して雫の返事は無かったが、霰の屋敷は一目で判った。そこは雫の家から少し坂を上がった所だった。

そして屋敷の前に車を止めて門をくぐろうとすると俺の上着の裾を何かが掴んだ。

「先に帰っていてくれと言ったはずだが」

「……」

返事が無い、そして俺の上着の裾を掴んだのは雫の小さな手だった。俺の頭の中には雫の家から出て行こうとした時の事が浮かんでいた。とりあえずもう一度だけ。

「先に帰っていてくれと言ったはずだが」

「……」

やはり返事が無い。

ここで押し問答するのも嫌になりそのまま歩き出すと雫も何も言わずに、上着の裾を掴んだまま着いてきた。

石の階段を上がり玄関の呼び鈴を押すと「開いてるよ」と声がする。仕方なくドアを開けて中にはいる。

しばらく、玄関から上がる気配が無いので霰が玄関に現れた。

「ハル、私は何て言ったかね。今夜、雫に場所を聞いて1人で来いと言わなかったか？」

ここで冒頭の状態になった訳だ。

「相変わらず、女の子1人も御せないのかい、いい大人が」  
俺は雲の言葉に目を背けた。

「仕方が無いね、そんな所に突っ立ってないで中にお入り。雫、ついて来たという事は覚悟があるんだね」

雲が俺の後ろに向かって声を掛けると雫が頷いたのだろう。  
雲の表情が柔らかくなった。

3人でリビングのソファに腰掛けていた。

雲の屋敷は重厚な洋館でリビングも俺が覚えている物と寸分違わず作られていた。

「さあ、何から話してもらおうかね。まずは何でハルがここに居るかだ」

「えっ？ お婆ちゃん。それはどう言う意味？」

「雫、同じ時間に同一人物が2人いる。理由はなんだい？」

「えっと、ドッペルゲンガーとか？ シェイプシフターとか？」

「雫は私の本の読みすぎだね」

「それじゃ、クローン！！」

「飛躍のし過ぎだよ」

「でも、お婆ちゃん。ハルトさんは吸血鬼さんなんですよ。私から見ればぶっ飛んでるじゃん」

雫の言葉を聞いた瞬間、雲が腹を抱えて大笑いしていた。

そんなに笑うと心臓が止まるぞ。

「おんやあ、ハルは私の心臓が止まるなんて考えてないだろうね」  
相変わらず喰えないババア。おっと、ご婦人だ。

「飛ばされたんだ、時空の狭間に」

これ以上、突っ込まれたくなく話題を戻した。

「ええ、タイムスリップって事なのハルトさん？ 信じられない」

「俺が一番信じられないのだ。400年以上も生きてきたのだから」

「それじゃ、笑うしか出来ないよね。やっぱり」



流石に雲の孫だけの事はある。察しが良い。

「それじゃ、お婆ちゃん。今の私達の居る時間のハルトさんは？」

「消息不明、生死不明だね」

「えっ……」

雲の顔が強張り血の気が引いて落ち着きが無くなった。

「雲、そんな顔するものじゃないよ。お前の横に居るのは誰なんだい？」

「は、ハルトさんでも……」

「俺は10年近く未来の俺だ。つまりこの時間の俺もどこかで生きているはずだ」

「でも、何で消息も生死も不明なんて」

俺は何も言わずに目の前にあるアンティーク調のテーブルに目を落とした。

「死にたがりのヴァンプ……ハルの2つ名だ」

「お婆ちゃん、でもハルトさんは不死身で」

「不死身だが死ねない訳じゃない。だから私が名前で縛ったのさ」

「名前で縛る？」

「ハルが私と出会った時に服従の口付けをしただろう、そう言うことだ。それでも誰かさんは未だに死にたがっているみたいだね」

「それじゃ、盟約って何？」

「昔、昔、ハルと私そして姉の時雨とで交わした約束。永遠に私達を守る約束さ」

「そうなんだ……」

「でも、何で雲の所に現れたのかねえ。ハル」

雲の人をからかう様な訝しがる様な態度から逃げるように。

「さあな、何でここに飛ばされたのかなんて俺には判らない。姫が気になったのは同じ匂いがしたからかな」

俺はそう言っただけで立ち上がった。

S S・日曜日（初登校前日）

俺は姫の通う水乃瀬高校に来ていた。  
理由は至極簡単だった。

この高校には結界が張られていたからだ。  
通常、結界を張ると言うことは何か邪悪な者から守る為か結界の中にあるものを外には漏らさないようにする為だ。そして、どちらか調べる為に俺はあえて先日結界に触れてみた。  
すると難なく結界の中に入れそこで姫の友達・氷室雪乃に出会い、そして彼女以外の気配や匂いにも気が付いた。

確信を持って校内を歩き回っていた。

日曜日と言う事もあり生徒も居ない、それでもどこからか見られている見られていると言うかこちらの出方を伺っているのだろう。  
とりあえず気配のする理事長室に向う。

すると奴はいた一つ目の巨人が？

怯えながら棍棒の様な物を持って……

「お前はサイクロプスなのか？」

「は、はい」

「本当に？」

巨人とは言いがたい体格に拍子抜けしてしまった。

一応これでも下級ではあるがその昔は神と言われた者の成れの果てだった。

「お前が結界を張れる訳ないな」

「はあ」

「それじゃ、あの婆さんが一枚も二枚も咬んでいるのだ」

「はあ」

なぜ、日曜日にも係わらずここに居たのかを尋ねると数日前に急に現れた大きな気配の所為でかなりの人でないものが慌てふためいて

いたらしい。

本題に入ろうとすると理事長に家に来て話をしてくれと懇願された。仕方なく理事長の自宅に向う。

そこは見晴らしの良い高台の大きな屋敷だった。

何でも天目鉄鋼あまのまとか言う大企業の社長も兼ねているとの事だった。

「そんな、社長さんが何でこんな島に居るんだ？」

「そ、それは。家内が……」

大きな屋敷の成金趣味の様な豪華絢爛な応接間に通される、そこで見た事のある少女に出会った。

「パパ、もう帰ってきたの……そ、その人は……だ、誰？」

「この方はパパから見て雲の上の人だよ」

「えっ？ ほ、本当に？」

「ああ、失礼のないようにね」

「う、うん。判った。それじゃ私はこれで失礼します」

そう言いながらぎこちない態度で頭を下げて応接間を後にしたのは、雫を足蹴にして鍵を投げ捨てた少女だった。

その少女と入れ替わりに派手な女が現れた。

「あなた！ 学校は大丈夫なのでしょーうね！」

派手な衣装に、キラキラした貴金属。

そして見るも無残な化粧。

ある意味化け物の方が可愛しく見える。

「こ、こちらは？」

「あの……気配のご本人です」

「はあ？」

眉間に皺を寄せて人の顔をじろじろ見やがる、いい加減イライラし始めていた。

「お、お前はなんて恐ろしい事を……」

「何を言ってるんだい。こんな若造の何処にあんな大きな気配があるって言うんだい？」

「黒き悪魔、地獄の執行人と自己紹介すれば良いのかな？ 若作りで申し訳ない」

普段より多くどす黒いオーラーを放つと成金趣味の応接室がビリビリと振るえ、置物の坪が割れる。

化け物より酷い女を睨みつけると腰を抜かしてしまった。

これ以上は弱い者イジメをしているどこかのお嬢様と同じ事になるので溜息をついた。

腰を抜かしてもまだ、俺に食い下がる所を見るとかなりの兵かただの馬鹿なのかどちらかなのだらう。

「わ、私は天目の末裔の……」

ただの馬鹿のようだ、判るように説明すると観念して何も言わなくなってしまった。

簡単な事だ、金で人の面を叩く様な人間にはそれ以上の金で張り倒すか金を取り上げてしまえば良い事だった。

売られた喧嘩はいくらでもお買い上げ、そして数千倍返しを座右の銘に生きてきた。

それ故に付いた2つ名が黒き悪魔、地獄の執行人なのだ。

後の話はスムーズだった。

そして最後に釘を刺すことも忘れなかった。

「甘やかして育てた責任はきちん取るのだな、万が一これ以上何かあるようならペナルティーを与える事になる。俺の手を煩わせるな。自分の子どもが何をしてきたか知らない訳ないだらうな」

「だけどねえ、たかだか他人の子の1人や2人。なんて事無いだらう」

少し気を許した態度を見せるとそんな事を言ってきた。

ただの馬鹿ではなくかなりの馬鹿だったようだ。

旦那の方は頭を抱えている。

お構いなしに奥様の方にお伺いを立てた。

「申し訳ない、お電話をお借りしたいのだが」

「勝手に使いな、ちゃんと電話代は払いなよ」

電話を借りて電話する。

電話先の相手は驚いていたが数分後には実行されたようだった。

応接間にある無駄に大きなテレビをつけると臨時ニュースが流れた。

『先ほど、天目鉄鋼 九州工場で大きな爆発があった模様、今の所、死傷者は確認されていません』

「たかだか他人の会社の1つや2つ。なんて事無いだろう。電話代だ」

そう言つてガタガタ震えながら脂汗を流している奥様の額に福沢諭吉を一枚貼り付けた。

「安心しな、従業員に労災を支払うような事は一切無いからな。俺は人を傷付けるのが大嫌いなんでなんでな」

そう言つて豪華絢爛な屋敷を後にしたが、流石に後味が悪かった。

仕方なく後日、旦那の理事長には上からの融資の話をしておいた。

何が縁で神と言われた者があんな守銭奴みたいな者と一緒になつてしまうのか。

まあ、どこぞの大泥棒の三代目も守銭奴の女の事が好きらしいから仕方が無いのか？

その夜はあまり考えたくなく、島を車で行くあても無くブラブラして夜遅く姫の家に戻った。

## 水乃瀬高校・1

お婆ちゃんの家から帰ってきた後は何となく気まずい雰囲気になってしまった。

「同じ匂い」ってどう言う意味なんだろう。

……怖くて聞けなかった。

それに、盟約の話とかをハルトさんに聞こうと思ったのに、ハルトさんは日曜日の遅い時間まで眠っていて夕方から出かけたままだった。

「もう、こんな時間だ寝なきゃ」

そんな独り言を言いながら2階の自分の部屋に行く。

向かいの両親の部屋を見るけれど、部屋の主はまだ帰って来なかった。

どうしたんだろう、このまま帰ってこないなんて無いよね。

それに聞きたい事やお話をしたかったのに。

色々な事が頭の中を駆け巡り眠れない。

ベッドの上でゴロゴロしていたがいつの間にか眠ってしまったようだ。

翌朝、目覚まし時計を見て飛び起きた。

「遅刻する!!」

目覚まし時計はいつもより30分進んでいた。

慌てて制服に着替えてキッチンに向った。

「ハルトさん？」

キッチンにはシャツにネクタイ姿、つまりスーツの上着を脱いだ状態でハルトさんが立っていた。

「朝食は出来ているから、早く食べなさい」  
相も変わらず抑揚の無い声で言われた。

私に対してはこれがスタンダードなのだろう。気にしないでテーブル

ルの上を見ると、トーストにサニーサイドアップにサラダ、そしてコーンスープが並べられている。

「うわあ、美味しそう」

思わず声を上げてしまった。

「ターンオーバーの方が良かったかな？」

「ターンオーバー？ あつ目玉焼きですか？ こっちがいいです。半熟の方が好きだから」

美味しそうな朝食を堪能する、特にコーンスープが美味しかった。

「ハルトさんこのスープは既製品じゃないですよね」

「簡単に出来るスープだが」

「それじゃ、後で教えてください」

「構わないが早くしないと時間が無いのじゃないのか？」

「もう、間に合わないです。だから……」

「だから、諦めるのか？」

ハルトさんが寂しそうな目で私を見つめていた。

「でも、どう足掻いても無理なものは無理だし……そう言えばハルトさんはどこかにお出掛けですか？」

私は溜まらずに話題を変えた。

「仕事だ」

「お仕事？ 吸血鬼さんですか？」

「人でも人でなくても今の世の中は仕事をしないと生活できないのだ」

でも、何の仕事をするのだろう。

そんな事を考えていたけれど私の最優先事項は登校する事だった。

ハルトさんが先に食事を終えて食器をシンクのボールに入れる。

そしてその後を私が続き食器の入ったボールに水を張って、家を飛び出すとハルトさんがあの可愛いミニクーパーで待っていてくれた。

「学校まで送るから乗りなさい。これなら間に合うだろ」

「は、はい！」

学校に近づくに連れて制服姿の生徒が目につくようになってきた。水乃瀬は男女とも冬服は紺のブレザーで女子は紺のチェックのスカート。

シャツには男子はネクタイ、女子はリボン。

それぞれ学年で色が違う1年は赤、2年はオレンジ、3年は紫になっている。

歩くと30分くらいかかるのに車だと10分もかからないで学校に着いた。

浮かれ過ぎていて周りの視線に気付いたのは車を降りた瞬間だった。それでも私は精一杯の笑顔でハルトさんに挨拶をした。

「ハルトさん、行ってきますー！」

なんだか凄く嬉しい、『行ってきます』が言えて『ただいま』が言える。

ただそれだけが嬉しかった。

昇降口に向うと後ろから声を掛けられた。

「雫！ おはよー」

「ひゃうー！！」

驚いて変な声を上げてしまった。

恐る恐る振り返ると雪乃ちゃんが満面の笑顔で立っていた。

「彼に送ってもらったんだ。ラブラブ」

「そ、そんなんじゃないよ。ハルトさんは」

「でも、大人つて感じで素敵だよ。ハルトさんって言うんだ彼」

「う、うん」

確かに素敵だった。

グレーのスーツに明るいブルーのシャツを着て落ち着いたゴールドのネクタイを締めていて、それよりもハルトさんのスタイルだからかもしれない。

そんな事を考えながら下駄箱の前に行く、そして覚悟を決めて下駄箱を開けるとそこにはちゃんと上履きが入っていた。



「どうしたの？」

「今日は何もされてない」

「そんな日もあるんじゃない、ラッキーだね」

「う、うん」

でも、この時にはつきり違和感を覚えた。

今まで一度も悪戯されていなかった事など無かったのだから、登校して一番初めにする事は上履きを探るか汚れを落とすかのどちらだったから。

そして、2階の教室に行く。

教室に入っても違和感が取れなかった。

雪乃ちゃんが私の後ろの自分の席に座り話しかけてくれた。

「本当に、今日はいつもと違うね。なんだかピリピリしている気がするね」

「そ、そうだね。でも、私はこれはこれで怖いんだけど」

クラスメイトでイジメや嫌がらせをしているリーダー格の天目華保あまめかほ、理事長の一人娘で傲慢かつ我儘のただれど取り巻きが沢山いる。

その彼女が異様に殺気だっているのだ。

触らぬ神に祟りなしを決め込んで気にしないことにする。

こちらが気にしなくても気にしてくるのはいつも彼女達なのだけど。

「彼なら守ってくれるよ」

ボソツと何か後ろから聞こえてきて、振り返ると雪乃ちゃんが不思議そうに首を傾げて微笑んでいた。

何か言った？

そう聞こうとしたところでチャイムがなり虚弱体質で名前に見合わず気弱そうな担任が……

ドアが開いて教室に入ってきたのは担任ではなくて小さな花柄のワンピース姿の副担任の堤先生だった。

クラスの中がざわついた。

おっとりした感じの堤先生の顔がなんだか少し赤く感じる。そしていつも以上に落ち着きが無かった。

「堤ちゃん、どうしたの？」

「今日は一段と可愛いよ」

男子の声が上がるとますます、堤先生の顔が赤くなった。

「先生をからかうものじゃ有りません、静かにして！」

そしてこの堤先生はからかわれたりするが、それなりに人気があり生徒に慕われていて生徒は大抵言う事を聞いていた。

「実は担任の鬼頭先生が体調を崩されまして急遽、換わりに新しい先生が来られました」

「えっ！ ありえねー」

「鬼の霍乱かあ？」

「バーカ、あれのどこが鬼なんだよ」

主に男子生徒から再び声が上がった。

「月城先生、お願いします」

月城？ そう思った瞬間、私の体は瞬間冷凍された。

初めてお婆ちゃんがハルトさんのフルネームを言った時は緊張していて気付かなかったけれど月城はお婆ちゃんの苗字と同じだった。

そして今、教壇に立って居るのは紛れも無くグレーのスーツを着たハルトさんだった。

それも優しそうなオーラーを振りまいて爽やかな笑顔でクラスメイトを見渡していた。

クラスが一瞬にして静かになった。

そして黒板に向かいチョークで名前を書き始めた。

『月城陽斗つきしろはると』とそして自己紹介を始めた。

「後々で判ると思うので先に言っておきます。私は姫宮 雫の従兄弟になります。判らない事はかりなので彼女と親しく話す事があると思いますが公私の区別はきちんとします、誤解の無いように」

私の後ろで雪乃ちゃんが手を振っているような気配がして冷や汗が

流れ、それと同時に堤先生が口を開いた。

「あら、もうご存知の生徒さんがいらつしやるみたいですね」

「ええ、氷室雪乃さんとは土曜日にお会いしました。それに他にも数人、雫、おつと失礼。姫宮と仲良く金曜日の放課後遊んでいた生徒さんの顔があるので安心しました」

その瞬間、私はハルトさんのあの優しそうなオーラーの後ろにどす黒い禍々しいオーラーを感じた。

私の感覚は間違いないだろう。

だって華保の取り巻きが明らかに怯えていた。

そして華保は尋常じゃないくらい見るからに狼狽していたのだから。

「へえ、雫。陽斗の中なんだ」

「えっ？」

後ろから聞こえた雪乃の声で我に返った。

「だ、だって。ハルトって呼んで良いつて言われたから」

「まあ、雫ならそんな事だろうと思った」

## 水乃瀬高校・2

授業中以外は質問攻めが続いた。

それはある意味イジメや嫌がらせより疲れた。

理由は簡単、どう説明して良いか判らないから。

だって、ハルトさんと出会ってまだ4日目。

それに私が知って居るのは吸血鬼で海外を転々として400年以上生きてきて、10年後の未来から来たなんて誰にも言えない事ばかりなんだもん。

それでも何とか苦し紛れでも答えた。

海外を転々としていたからあまり会った事が無い事。

それに私より祖母の方が月城先生とは親しい事など知る限りで答える。

昼休みのチャイムが鳴るとうな垂れながら席を立った。

「あれ？ 今日はお弁当じゃないの？」

「うん、寝不足で今朝寝坊したの」

「それで、彼に送ってもらったんだ」

「うん、でもなんで教えてくれなかったんだらう。一緒に住んでるのに」

「……………」

雪乃ちゃんの返事がなく見ると周りのクラスメイトの視線を集めていた。

そして雪乃ちゃんに手を引っ張られた。

「ちよっ！ どうしたの急に？」

「いいから来なさい、何で不用意にあんな事言うかな」

雪乃ちゃんに怒られながら学食まで半分引きずられながら連れて行かれた。

2人でトレーに日替わり定食を乗せてテーブルに座る。

ここ、水乃瀬高校は島の中にある二つの高校の1つでもう1つは公

立の高校だった。

私立で有るが故にお坊ちゃん、お嬢ちゃん学校と呼ばれている。ただ公立より入学金や授業料は高いだけのこと、それでも校内の設備はそれなりに充実していた。

そして学食も広めに作られている、それでも弁当派が多いせいかもしれ程混んではいなかった。

それなのに、雪乃ちゃんに学食の中ほどの席に連れて行かれた。

「さあ、聞かせてもらおうよ。何で先生と2人暮らしなの？」

「うう……雪乃ちゃん怖いよ」

「何で、雫のお婆ちゃんの家でなくて雫の家なのかしら」

「うう……言わないと駄目かな？」

「それに、寝不足って……雫に限って……でも……」

雪乃ちゃんが何を言っているのか一瞬理解できなかったけれど……

「ば、馬鹿！ そ、そんな筈無いじゃない！ ただ帰りが遅かったから心配で」

慌てて立ち上がり声を荒げてしまった。

そして雪乃ちゃんが楽しそうに私の顔を見ているのに気付き真っ赤になって椅子に崩れ落ちた。

「本当に好きなんだ」

「ち、違うよ」

「でも、雫は恋なんてしたことあるの？」

「うう……ないかも。雪乃ちゃんだって」

「私はあるわよ。こう見えても恋愛経験は豊富なんだから、雫よりは大人だもの。で、何で2人暮らしなのかなあ？」

親友である雪乃ちゃんには嘘を付きたくは無い、でも本当の事も言えるはずがなかった。

私が一緒に居てくださいなんて泣きながらお願いしたなんて。その時、学食がざわつき始めていた事など耳に入らなかった。

そして雪乃ちゃんから目を逸らしてお味噌汁のお椀に口をつけて嘔

出しそうになった。

「横、空いているかな？」

「ええ、どうぞ」

雪乃ちゃんも無意識に返事してから、驚いて少し横に飛び跳ねた。声を掛けていたのはトレーを持ったハルトさんだった。

そして何も無かったようにハルトさんが話し始めた。

「ボディガード代わりに一緒に暮らしているんだ。姫の婆さんに頼まれてね」

「せ、先生。聞いてたんですか？」

「もう少し、姫の困っている顔が見たかったけれどね」

抑揚の無い声で言われても内容が変わるわけでもなく顔が真っ赤になった。

するとテーブルの下で雪乃ちゃんが私の脛を突っ突くからますます顔が赤くなる。

「も、もう月城先生。からかうの辞めてください」

「本気だと言えば信じるかな？」

「信じません！ 意地悪！」

「いや、悪い悪い。急に月城先生なんて呼ぶからね」

雪乃ちゃんに目をやるとお腹を抱えて笑っている。

そして周りでは聞き耳を立てた生徒が沢山居た。

それからは何を食べたのか全く覚えていなかった。

「それじゃ、お先に失礼するよ」

そう言っつて月城先生が席を後にした。

「そろそろ、教室に戻ろう」

「う、うん」

私は疲労困憊してフラフラと雪乃ちゃんに連れられて教室に帰り机に倒れこんだ。

午後の授業が終わりいつもなら憂鬱な放課後のはずなのに、今はそんな心配はいらないみたいだった。

何度と無く華保やその取り巻きと目が合うけれど、直ぐに私から視線を外してそっぽを向かれた。

理由は未だに判らなかつたけれど。

部活に行く雪乃ちゃんとは別れて家に帰ろうと階段を下りて昇降口に向っていると呼び止められた。

「姫宮さん、時間あるかしら？」

振り返ると養護教諭つまり白衣姿の保健の先生が立っていた。

「鳴海先生、何の用ですか？」

鳴海先生はスレンダーで背が高くって女の私から見ても憧れてしまふ先生で、緩いウェーブのかかった茶色い髪に真っ白い肌で吸い込まれそうな瞳をしている。

とても綺麗で男子学生人気ナンバーワンの先生だった。

「ちょっとだけ、保健室でお話したいのだけどいいかしら？」

「えっ、でも私先生に話すことなんて何も無いですよ」

「いいからね、ちょっとだけ」

不安になり胸にあるロザリオに手を当てるこれは私の癖。

不安になる時に無意識にしているらしい。

すると階段の上から声がした。

「姫、帰らないのか？」

「あつ、ハル。うっ、月城先生」

その時、微かにチツと舌打ちする音が聞こえた気がした。

でも誰が？

私とハルトさん以外には鳴海先生しか居ない。

あんなに綺麗で優しそうな顔をしている鳴海先生が舌打ちしている場面なんか浮かんでこなかった。

「姫に何か用かな、鳴海水蘭先生」

「な、何で私の名前を？ やっぱりあなたは」

「おや、獣臭い匂いがするが」

昇降口の方から水乃瀬高校名物教師、体育の熱血・大上先生がこちらに向って走ってきた。

すると鳴海先生が溜息をついて頭に手を当てた。

「な、何で貴様がここに居る？ 力の大妖！ 黒き悪魔！ 地獄の執行人！ それより俺様は貴様が月の者と一緒に居る事は許さん！」  
ハルトさんより少し小柄だけれど体つきががっしりとしている大上先生がハルトさんの胸倉を掴んだ。

私が驚いていると優しく鳴海先生が肩を掴んでくれた。

「いいのか？ 俺にこんな事をして？ 若造が」

ハルトさんが笑顔で言っているけれどその笑顔に比例するようにドス黒いオーラーが出ていた。

「ひいつ！」

思わず声を上げてしまったするとハルトさんから黒いオーラーが消えた。

「校内では勘弁してくれ。お前とやりあう気は無い、すまなかった」

「あらあら、有りえないもの見ちゃった」

ハルトさんが頭を下げると鳴海先生が驚いていた。

「腰抜けが」

そう言い放って大上先生が走り去った。

「廊下は走っちゃ駄目よ！」

鳴海先生を見ると嬉しそうに手を振っていた。

「さあ、姫。帰ろう」

ハルトさんが振り向いて声を掛けてくれた。

とても寂しそうな瞳で、そんな瞳の中に僅かだけれど優しさが隠れているような気がした。

すると鳴海先生がハルトさんに話しかけた。

「本当にナイトは腑抜けになったのね」

「裏でも表でも俺の様な者が必要なくなればそれが平和って事なんだよ」

「愛する者が守れなかったから？」

「長く生きていればどうしようもない別れもあるだろ。ただそれだけの事だ」



鳴海先生が大きな溜息をついた。

私は訳が判らずハルトさんと鳴海先生の顔を交互に見ていた。けれど、ハルトさんの言葉だけが胸を締め付けた。

「それじゃ、質問を変えましょう。この子の前であんな事言われたのに否定しないのね」

「姫は俺の正体を知っているからな」

「それじゃこの子は……」

その時、一瞬だけハルトさんの視線が凍てつくような視線になった気がした。

「あまり、お喋りが過ぎると干物にするぞ」

「でも、この子はあなたを受け入れた。この子が鍵なのかもね」

「それはどうかな、俺はこの時代に居るべきじゃないからな」

「それじゃ、シユヴァリエあなたはいつたい……」

ハルトさんの車で家に帰る。

先生がこんなに早く帰れるものなのかと思ったけれど、ハルトさんと一緒に居られると思っただけで訳も判らず嬉しかった。

「は、ハルトさん。聞いても良いですか？」

「質問は帰ってからにしてくださいませんか？」

「は、はい。判りました」

抑揚の無い声でシャットダウンされた……

チクリと胸に何かが刺さった気がした。

## 初登校の夜

学校から帰り、考え事をする為にキッチンに立ち夕食の準備をしていた。

昔から、何かを考える時は料理をしていたり車を流したりするのが癖になっていた。

しかし、大上は仕方がないと思ったが水蘭まで居るとは思わなかった。

いらぬトラブルにならなければいいが、水蘭の事だそんな事は起こさないだろうが大上は少し厄介だな。

そんな事を考えていると姫が声を掛けてきた。

「今晚は何を作るんですか？」

「カレーとサラダかな」

「カレーですか？」

「何か不満でも？」

「これは何ですか？」

キッチンカウンターに置いてある軟骨ソーキを指差して姫が聞いてきた。

「豚のスペアリブだが、見た事無いのか？　ここでは普通に食べるだろう」

「あつ、聞いた事はあるけど。あまり島の料理はお婆ちゃんも作らないから。知らない物の方が多いかも」

「そうなのか、霽は何でも知っているとと思うがな」

「そんな筈無いじゃないですか、紅茶の入れ方だってハルトさんに教わったって言ってたし」

そんな事を言いながら姫は俺の横に立っていた。

「お手伝いと言うか、見てて良いですか？」

「構わないが俺の料理は我流だぞ」

「それでも良いんです」  
嬉しそうな顔をして俺が料理するのを見ていた。

最初に軟骨のスペアリブを軽く焦げ目をつけて圧力鍋に入れて適量の水を入れ火にかける。

あくを取りながら煮立たったら蓋を閉め圧力をかけて50分くらい炊き圧を抜く。

軟骨を煮ている間に別の鍋で野菜ベースを作る。

玉ねぎや人参、セロリなどの香味野菜でベースのスープを作る。

ベースと言っても冷蔵庫にある野菜の端材などを適当にぶち込んでただ煮込むだけだ。

そして軟骨が柔らかくなったら野菜ベースとあわせてホールトマトを入れて煮込む。

しばらくしたらそこに林檎を2〜3個皮を剥いて入れる。

林檎が柔らかくなったら人参を加えて煮込み人参が柔らかくなってきたらジャガイモを加える。

ジャガイモは早めに入れると煮崩れを起こして形が無くなってしまふ。

そしてカレーのルーを入れる。

好みでオリジナルのルーを作ってもいいが面倒なので数種類の市販のルーを混ぜて入れて出来上がりだ。

俺がカレーを煮込んでいる間に娘がゆで卵を作りサラダを作ってくれた。

「えへへ、私の得意な千切るだけ切るだけのグリーンサラダだけだね」

そんな事を言っただけだが手際がいいのでかなり料理は好きなのだろう。

カレーを盛り付けてテーブルに運び2人の夕食が始まった。

「うわあ、このカレー。林檎の良い香りと甘みがある。それで……」

辛い!!」

「子ども向けのカレーじゃないからな」

「でも、凄く美味しい。こんなカレー始めてかも。ハルトさん、聞いても良いですか?」

「家ではハルトさんなんだな」

「もう、茶化さないで下さい。学校では恥ずかしくってファーストネームでは呼べません」

「まあ、良い。ミドルでも真名でも構わないさ」

「大上先生と鳴海先生は知り合いなのですか?」

「知り合いか、大きく括ればそうだな」

「曖昧だな」

姫がスプーンを持ったまま口を尖らして抗議している。

「何が知りたいのだ?」

「ハルトさんの事かなあ?」

「それならあいつ等は関係ないだろ」

「もう、何で直ぐに会話を終わらせようとするんですか?」

「姫の質問に答えているだけだ」

「もう、いいです。何も話す事はありません」

姫の瞳から輝きが薄れていき、哀しいとも寂しいとも言えない様な表情になっていく。

いつの間にか時雨と雫を重ねてしまっていたのかも知れない。

彼女にそんな顔をさせてしまっている自分に腹が立つがもう1人の俺が彼女に近づく事を拒んでいた。

しばらく、沈黙が続き雫がスプーンを置いた。

「もう、食べないのか?」

「美味しいけれど楽しくない、これじゃ独りで食べているのと変わらない。ハルトさんは雪乃ちゃんにはあんな優しく笑うのに私には笑ってくれない。一緒に居るのは私が頼んだからなの? それとも盟約の為なの?」

姫の瞳からは大粒の涙が溢れていた。

手で隠すでもなく椅子に座ったまま泣いている。

顔がクシャクシャになり雫が泣き崩れそうになる。

体が勝手に動いていた。

「優しくしないで！」

姫が泣き叫ぶが構わずに姫の体を抱きしめて床に座り込んでいた。

姫の小さな体が俺の腕の中で震えている優しく抱きしめる以外出来なかった。

これ以上でもなくこれ以下でもなく、それでも踏み込み過ぎたのかもしれない。

隠し続けてきた一番柔らかい場所の古傷から血が滲む。

「温かい」

無意識に取ってしまった行動にどうしていいものか考え込んでいると、不意に腕の中で声がした。

「鼓動が聞こえる」

「どう答えていいか判らないが生きている訳ではないが生きているからな」

「曖昧だな」

「人とは違うからな、人ではないもの。穢れた存在、忌むべき存在」

「でも、私は嫌いじゃないよ。同じ人間でも嫌いな人も居るし、会いたくない人だって居るもん」

「そうか、それは姫の月の血筋の所為かな」

「それはどう言う意味なの？ そう言えば大上先生が月の者って」

「これ以上は霰に拷問の刑に処されてしまうから、霰本人に聞いてくれ。時期が来れば教えてくれるはずだ。落ち着いたらどいてくれ」  
俺が姫に回っていた腕を解くと姫が俺のシャツにしがみ付いた。

「嫌、まだ落ち着かない」

返事を返さずに後ろにあつたソファーに寄りかかった。

「大上と鳴海は同族ではないが他の種族だ」

「えっ？ それって人ではないと言う事？」

「そう言う事になるな」

「他の種族つてもしかして吸血鬼さん以外にも居るの？」

姫が顔を上げて幼く見える目をまん丸にして俺の顔を見上げている。興味津々のその顔は高校生の顔にはどう見ても見えなかった。

この子は鋭いのか鈍いのかつかみ所が無くて困る。

「吸血鬼がいるのなら狼男や鬼が居てもおかしくは無いだろう」

「そ、そうだね。そうだよねハルトさんだけって事はないものね。

それじゃお婆ちゃんも」

「雲は人間だ。俺でも頭が上がらないのだからある意味、最強だがな」

「それじゃ先生2人はなんなの？」

「大上は人狼、鳴海はセイレーンだ」

しばらく姫が何も言わず頭を傾げていたが、急に震え出したので驚くと声を上げて笑い出した。

「うふふ、ああ面白い。狼男さんに人魚さんかなんだかぴったりだなイメージに。そう言えば土曜日に学校を出るときなんか言ってたよね。たしか和洋なんとかとカオスとか」

「和洋折衷でカオスだなと言ったんだ」

「それじゃ、あの時に他のつて……あれ？ 雪乃ちゃんしかあの時は居なかったよね。それじゃ雪乃ちゃんも？」

「俺は任務柄、気配や匂いを感じるのに長けているんだ」

「任務？」

「懲罰部隊、粛清部隊と言えはいいかな。人に危害を加える人では無い者を排除する任務だ」

「排除ってどうやってするの？」

「姫は知らない方が良く、それにもうその任務も必要ないだろう平和な世になったのだから」

わざわざ話題を変えたのに姫はどうしても人では無い者の事を聞きたいらしい。

「先生以外にも生徒の中にも居るって事なの？」

「もしもだ、姫の人には知られたくない事を他の人に知られてばらされたらどう思う?」

「絶対に嫌だ」

「そうだろう、誰にでも人に言えない秘密なんて物は持っている。

それは本人がカミングアウトするれば良い事で他人が公にする事じやないのではないのかな? 今、言えることは日本にも古来からアヤカシが人と共に住んでいると言う事かな」

「う、うん。そうだね」

姫が俺の胸に頭を預けた。

意識から遠ざけていたのに瞬時に蘇ってきた。

懐かしいような香り、雫の白い柔らかかそうな首筋。

そして押えきれない衝動が体の底から湧き上がって来る。

咄嗟に姫の体を退かして立ち上がり冷蔵庫に向う。

調理用を買ってあった赤ワインを取り出しグラスに注ぎ、ポケットからピルケースを取り出してカプセルを一錠グラスに入れてかき回し煽るように飲み干した。

「は、ハルトさん?」

鼓動の高鳴りが抑えられず呼吸も荒くなっている、振り返ると姫が不安そうな顔で俺の顔を見ていた。

「大丈夫だ、問題ない」

「でも、凄く苦しそう」

「すまないが独りにしてくれ」

「それじゃ、片付けは私がしますから。お部屋で」

「悪いな」

そう告げて部屋に戻りベッドに体を投げた。

やはり踏み込み過ぎた。

そして人と人では無い者の関係を改めて認識させられたのだ。

その夜は、久しぶりに力を解放してしまった。

瞳は金色になり背中 of 蝙蝠の様な大きな羽で闇夜を彷徨っている。人目に付かないように大きな赤と白に塗り分けられた大きな電波塔の一番上で夜を明かす事にする。

冷たい北風が頭を冷やすのに丁度良い。

火照った体をクールダウンさせるには震えるくらい寒い方が都合が良い。

無機質な鉄骨が今は心地よかった。

所詮、人では無い闇を支配する者。

空を見上げると剣の様な月が出ていた。

「月か……」

そして眼下にはそれ程煌びやかではないが街の明かりが夜景となり広がっていた。



## 理由・1

ハルトさんの様子がおかしくなったあの夜から、少しだけ変化があった。

ハルトさんの視線が優しくなった。

時々戸惑っているのか瞳が揺れている時があるけれど。

それと、私からハルトさんの腕を触ったりは出来るようになったのだけれど一定の距離を感じる。

その時は理由が判らなかつた。

そんな事があつてしばらくして、相変わらずハルトさんと鳴海先生は仲が良かった。

でも、私の胸に棘が刺さる様な事はもう無かつた。

私が不安になりそうな事はハルトさんが全て教えてくれたから。教えてくれたじゃなくて私の前で2人の事を話してくれたの方が正しいかも。

鳴海先生とは古い仲間で闇の世界を司る3つの種族の末裔である事。そして鳴海先生は水に係わる者を守護し時には制圧する一族だと言う事。

「何で、ハルトさんじゃ駄目なんですか？」

「姫、ヴァンプの俺達は水が苦手なのだ」

「えっ？ あ、なんか本で読んだ気がする。でもそれじゃ、鳴海先生は何で陸上に居るんですか？」

「飽きちゃったからかしらね。水の中も陸の上も平和な事には変わらないのだけれど、人と係わっていると楽しいから」

「なんだかハルトさんとは真逆の答えみたい」

「シユヴァリエは堅物だからね」

「シユヴァリエって意味があるのですか？」

「ナイトつまり騎士ね。愛する者を守る為のナイト、私も守って欲

しいなあ」

「水蘭のお眼鏡に敵う奴など居るのか？」

鳴海先生がハルトさんに向って思いつきり舌をだしてアツカンベーをしている。

こうしていると人もそうでない者もお婆ちゃんが言うとおり、同じ世界に生きていれば人も何も関係無い気がしていた。

「それじゃ、もう一つの種族ってどんな人なんでしょうか？」

「……………」

「……………」

私の質問に2人は黙ってしまった。変な質問だったかなあ？

「もう一つの種族は竜の一族だ」

「竜？ 伝説の？」

「俺らだって伝説上の生き物みたいなものだろう。まあ俺らと違い神に近い存在と言っていていいかな。大昔は見かけたと聞くが今は見る事も無いな。まあ、あいつらが出てきたら大騒ぎになるからな」

「それって大きいからですか？」

「大きさなんて関係ない。奴らの力は強大なんだ、だから一度何かあれば大騒ぎになるんだよ。こんな島なら跡形無く消し飛ぶだろうな」

「うう…………… 本当に伝説みたい。それじゃ何で大上先生はハルトさんの事を嫌っているんですか？」

「それは、昔からの因縁でヴァンプと人狼は仲が悪いんだ。ただそれだけだよ」

「本当かな？ それだけじゃない気がするんだけどなあ」

その時、鳴海先生のハルトさんを見る目が寂しそうな感じが一瞬だけした。

「いろいろあつたからな」

ハルトさんが学校に馴染みはじめると私の周りにも変化が見られた。今までイジメや嫌がらせをしていた華保のグループからは、ハルト

さんが来てから無視はされるけれど何もされなかった。

そしてお喋りが出来る友達が増えてきた。

友達が増えたのと同じように男の子とも話す機会が増えてきていた。でもそれは主に鳴海先生の事だった。

最近、親しくなった友達は紺野奈々枝こんのななえちゃんに神童しんどうミコちゃんの2人、奈々枝ちゃんは背も高くってお洒落さんで長い黒髪が素敵で物怖じしないで何でもはつきり喋る女の子。

そしてミコちゃんはおっとりしているけれどいつも笑顔でショートボブの似合う可愛いらしい女の子なんだ。

2人とも私の事は気になつていたけど華保や取り巻きが怖くって話しかける事が出来なかったんだって。

そして、2人ともハルトさんの事が大好きみたい。

でもその大好きも恋愛とかじゃなくて憧れみたいな感じなのをお喋りしていると感じるの何でだろう。

そんな事が日常になりかけたある日、それは起こってしまった。

いつもの放課後、雪乃ちゃんは部活へ向い私と奈々枝ちゃんとミコちゃんの3人で2階の廊下を歩いていた。

すると他のクラスの教室から数人の男子が飛び出してきた。

「やっと、捕まえた。なあなあ月城と鳴海先生って付き合っているのか？」

「ただの友達だよ」

私は後ずさりをしながら答える。

奈々枝ちゃんとミコちゃんは怖がって近づいてこれないみたいだった。

「そんな筈ないだろ、あんなに仲がいいのに」

「私に聞いてもそれ以上の事は知らない。直接聞いてみて」

「直接聞けないから、お前みたいな女に聞いてるんだろ！」

そう言いながら男子生徒が私に向って歩きながら私の肩を小突いた。私は後ずさりしていたので、小突かれた拍子に躓く様に勢い良く開

けられて2重になった廊下の窓ガラスに背中をぶつけた。

何が起きたのか判らなかった。

背中にぶつかつた窓ガラスがガタンと音を立てて下にずれていく。そして体が空中に放りだされた。

日差しが弱まつた青い空と薄いオレンジ色の雲が見える。

浮遊感が無くなり背中に衝撃を受けた瞬間、背中に温かい物が流れている感覚が伝わった。

そして奈々枝ちゃんとミコちゃんが何かを叫びながら私を見ていたけれどその声は聞こえなかった。

ぼんやりする意識の中で私を呼ぶ声が聞こえる。

そしてハルトさんの苦痛に歪む顔が見えた。

「あれ？ どうしたのハルトさん。そんな顔をして。そんな顔をしてしないで」

すると胸の辺りから何かが抜けると口の中から何かがあふれ出した。手で触れると生暖かい、顔の前に翳した手は真っ赤だった。

「なんで、血が出てるんだろう」

体から力が抜ける。

ハルトさんを見ると右手に刀の様な持っていた。そこで意識が途切れた。

## 理由・2

放課後になると俺は水蘭といつもの様に話をしていた。

それが日課になっていた。

他愛の無い昔話など闇の世界の話を、理由？

それは簡単な事、こんな話を出来る奴には滅多に出会えないからそれだけの事。

粛清や懲罰する事が宿命の俺達は独りで行動する。

水蘭の様な水の中の物はそれなりの配下を従えるが差して変わりは無い。

綺麗な言い方をすれば俺達は戦友の様なものだった。

そんな事が日常になり始めた時。

生徒の悲鳴でそんな日常は壊された。

悲鳴を聞いた瞬間、雫に何かが起きたのが直感で判った。

中庭に向うと傾いた日差しに割れたガラスがキラキラと反射している。

それを遠巻きに見るように2人の雫のクラスメイトが立ち尽くしていた。

放課後という事もあり他の生徒は見当たらなかった。

騒ぎを聞きつけた生徒や先生を水蘭が追い返した。

追い返したというかセイレーンの声で惑わしたという方が正しいのかも知れない。

そして雫がガラスの破片の真ん中に横たわり鳩尾の辺りから真っ赤になったガラスが突き出ていた。

そんな雫の姿を見た瞬間。

忌まわしい過去の出来事がフラッシュバックして押えていたものの箍が外れて暴走し始めた。

体がガタガタと振るえ。

禍々しいオーラーを抑えることが出来ず、黒い影が体からあふれ出た。

雫と時雨の面影が重なり、我を忘れるように横たわる体に近づこうとした時に水蘭が目の前に立ち、行く手を塞いだ。

「水蘭！ どけ！ 貴様でもただじゃ済まさないぞ、邪魔をするな！！」

「落ち着きなさい、今のあなたでは彼女は救えない。それ以上暴走するのなら境界を守る者としてあなたを排除します」

「やってみろ」

そう言った瞬間に水蘭の瞳から一滴の涙がこぼれ、俺の頬を水蘭が打ち抜いた。

「あなたにしか彼女を救うことは出来ない。あなたが冷静さを失ってどうするの？」

そして背後から気に障る声があった。

「貴様の所為だ、やはり貴様は月の者の厄病神だ！」

足元に落ちていたガラス片を掴み、振り向き様に投げつけると大上の頬を掠め、髪の毛を一掴み切り裂いて後ろのコンクリートの壁にガラス片が突き刺さった。

大上は慌てて逃げ出した。

「シユヴァリエ！ 急ぎなさい」

雫の横に跪き、雫の名を叫びながら雫の顔を覗き込む。雫が何かを喋ろうとしていたが声にならなかつた。

そして雫の鳩尾から突き出ているガラス片を掴み、ゆっくりと引き抜くと、ゴボツと音がして雫の口から大量の血が噴出した。

それを雫が手に触り、虚ろな目で見ている。

「どうするつもりなの？ ここには銀のナイフなんて無いわよ」

「慌てるな、そんな物には必要ない。俺にはこれがあるからな」

そう言っただけで右手で徐にわき腹に手刀を突き刺すとワイシャツを突き破り、シャツに血が滲む。

体の中に手首がズボツとめり込み、俺の口から血が噴出した。

「かほつ……」

「な、なんて事をするの？」

水蘭の言葉に耳を貸さずに歯を食いしばり体の中に封印していた物をわき腹から力一杯引き抜いた。

「鬼切り……そんな物を体の中に」

それは180センチはあるうかという大太刀の日本刀だった。

「シユヴァリエ、あなたまさか！」

雫の体の上で大太刀の刀身を一気に左腕に走らせる。

ザックリと傷口が広がり血が止め処なく溢れ出た。

その血を雫の傷口に流し込んだ。

俺の血が蒸発する間もなく雫の傷口に流れ込んでいく、雫の傷口は徐々に修復されていく。

始めは体に開いた穴から背中側に血が流れ出ていたが直ぐに止まる。背骨が形成され肺に開いた穴がふさがり動脈が繋がる。

そして綺麗に皮膚が修復される。

右手で雫の体を起こして背中中の傷を確認する。

幸いな事に切り傷程度で大きな傷はなさそうだった。

しかし、女の子の体に傷跡を残すわけにはいかずガラス片を掃い。

雫の体を右手で抱き上げて芝生の上に体を移動させて雫の背中に左腕を押し当てた。

「はぁ、はぁ、はぁ、」

俺の呼吸音だけが中庭に響く。

「それ以上は、あなたの体が」

「口を出すな。俺は死にはしない」

しかし、もう動き回れるだけの血も力も残っていなかった。

その場に座り込んで刀を封印する為に刀身を掴んでわき腹に突き刺し、徐々に体の中に押し込むと噛み締めた口角から一筋の血が流れ落ちた。

その血をいつの間に来ていたのだろう。

雪乃がハンカチで拭ってくれた。

何とか間に合った様だった。

いくら治癒能力が高いとは言え死んでしまった人間を生き返らせる事は出来ないのだ。

雫の胸は小さく上下している、そして可愛らしい寝息を立てていた。ポケットから車の鍵を取り出し背後にいる水蘭に投げつけた。

「悪いが雫を婆さんの屋敷に運んでくれ」

「あなたはどうするの？」

「動ける状態なら俺が連れて行く」

それだけを言うと水蘭が雫を赤ん坊を抱くように抱き上げて中庭から立ち去った。

俺が立ち上がるうとするとなんかが俺の肩を押さえつけた。

見ると雪乃と奈々枝、それにミコが3人がかりで俺の肩を押さえつけていた。

雪乃が俺の左手を掴むとミコが刀傷に薬を塗り、奈々枝が包帯を巻き終わると3人がポロポロと涙を流しながら俺にしがみ付いてきた。

「もう雫は大丈夫だからな、お前達はいつも優しいな」

3人はただ首を横に振っていた。

「悪いが片づけを頼めるかな？俺はあまり動けない、体を休めた方がいいのだが」

そう言うと3人は俺の体から離れてガラス片を片付け始める。

「すまないが後は頼んだよ」

そう言い残して俺は中庭から姿を消した。



「あれ？　ここはどこ？　私は……」  
体を起こすと少し頭がフラフラした貧血かなあ……貧血？

少しずつ何が起きたのか思い出し始める、でもそれが夢なのか現実なのかはつきりしない。

血がいつぱい出てて右手で……

右手を翳してみると僅かに爪の間に拭き残った血の跡がある。

そこで記憶がはつきりと蘇った。

そして恐る恐る鳩尾の辺りを触るが傷など何処にもなかった。

「な、なんで？」

何かを忘れている、そして何故か胸騒ぎがする。

慌てて飛び起きて部屋の中を見渡した。

そこは私が高校に入学するまで使っていた祖母の屋敷の栗の部屋だった。

「ハルトさんはどこに居るんだろう」

すると頭の中にハルトさんが刀の様な物を持っている姿が浮かんできた。

男子生徒に小突かれて、窓にぶつかる。

窓枠が外れて窓が落ち、自分の体も宙に投げ出されて。

ガラスが体に突き刺さり、沢山の血が出て。

ハルトさんが……

記憶が鮮明に思い出されると鼓動が跳ね上がり足がガクガクと震え出した。

そして体に何処も怪我が無いという事は、ハルトさんが自分の血で

……

どれだけの血を使えば、瀕死の私を救えるのだろうか。

そう思い1階に居るであろう祖母の元に行こうとするが体が思うように動かなかつた。

何とかリビングの入り口まで歩いてきた、するとリビングから話し声が聞こえてきた。

「そうか、時雨と雫がダブったか。ハルには辛い思いをさせてしまったな」

「大丈夫でしょうか、彼は」

「それはなんとも言えないな。シーランならどうする」

「私なら耐えられません。自分が愛した人と同じ事が目の前で起るなんて」

「今度こそハルは覚悟を決めるかもしれんな」

「そうですね。でも彼女はまだ」

「これが運命なら、話すべきは今じゃろうな」

お婆ちゃんと鳴海先生の声だよな。

ハルトさんが覚悟を決めるそれってどう言うこと？

ハルトさんとお婆ちゃんの言葉が頭を過ぎった。

『同じ匂い……』

『消息不明 生死不明』

そして……

『死にたがりのヴァンプ』

ハルトさんが居なくなってしまう、そう思った時にはリビングに駆け込んで声を上げていた。

「ハルトさんはどこに居るの？ ハルトさんのところに連れて行って！」

「雫、落ち着くんだ。お前の体は本調子じゃないだろ」

お婆ちゃんが私の肩を掴んでパニックになっている私を宥めた。

「私の体は大丈夫。ハルトさんが治してくれた。でも、ハルトさんが！」

「雫ちゃん、連れて行ってあげるから。少し落ち着きなさい」

「ゴメンなさい」

歯を食い縛り涙が溢れそうになるのをなんとか我慢した。

「雫、辛い判断をしなければならぬかもしれないかもしれない。お前は耐えられるのかい？」

「ハルトさんは私に生きる勇気をくれた。だから平気」

でも、お婆ちゃん言葉は私が思っている以上に重い事を私は知らなかった。

鳴海先生の運転でハルトさんの車で学校に向った。

街灯が点き始めていた。

それでも日本の南西の端に位置するこの島は日が落ちるのが遅く、冬といってもまだ少し明るく薄暗い程度だった。

校内に入ると流石に人の気配はしなかった。

「でも、何でお婆ちゃんまでついて来たの？」

「こつなつたのは私にも責任があるからだよ」

ふと前を見ると薄暗い校舎の間から誰かが走ってくるのが見える。段々姿がはっきりとしてくる、それはまだ制服のままの雪乃ちゃんだった。

「雪乃ちゃん……」

私はそれ以上言葉を続けられなかった。

雪乃ちゃんは厳しい顔つきで何も言わず涙を零しながら私の手を引っ張り走り出した。

「どうしたの？ 雪乃ちゃん？」

転ばないように雪野ちゃんに合わせて走り出す。

するとお婆ちゃんと鳴海先生も後ろを走って付いてきた。

そして雪乃ちゃんに体育館の裏に連れて行かれて私は言葉を失い、体が動かなくなつて立ち竦んだ。

奈々枝ちゃんとミコちゃんが大上先生の足に必死にしがみ付いている。

大上先生の顔を見ると目が血走り獲物を襲う様なギラギラとした目

つきで何かを凝視している。

大上先生の凝視している先には、ボロボロになった蝙蝠の羽の様なものが散乱していて。

くすんだ虚ろな金色の瞳をしたハルトさんが体育館の壁に凭れるように倒れこんでいた。

体には力がなく着ているシャツは所々裂けて薄汚れている。

「馬鹿が、何て事をしたんだい！」

「こいつの所為で時雨が」

お婆ちゃんが大上先生に向って声を荒げると、大上先生に向ってお婆ちゃんが叫んだ。

「それを時雨の孫のこの子に向って言えるのかい？ この若造が！」

「し、時雨の孫？ そのガキが？」

「ああそうさ、雫は時雨姉さんの孫だよ。あの後、結婚しなかったのは妹の私で。姉さんは結婚して雫の母親を生んで直ぐに亡くなってしまった。それでも幸せだったはずさ」

「そんな馬鹿な」

大上先生の体から力が抜けてその場へたり込んでしまった。

奈々枝ちゃんとミコちゃんがハルトさんの元に走り出してハルトさんの体にしがみ付いて泣きじゃくっていた。

「お婆ちゃん、本当なの？ 私がお婆ちゃんの孫じゃないって」

「すまないね、本当の話だよ。話す機会がなくてね」

「うっん、お婆ちゃんが私のお婆ちゃんにはかわりないもの。でも何で雪乃ちゃん達が」

私の手を握っていた雪乃ちゃんの瞳が不安そうに揺れている、何かを言おうとした時にお婆ちゃんが話し始めた。

「昔、ハルが日本に居た時にはね沢山の弱い者たちを助けているんだ。雪童女ゆきわらめや妖狐、それに座敷童子。」

憤ましく暮らしているだけなのに心無い人間に追い回されたり、仲間を苛められたりしていたのをね。だからそんな子達がこの学校に居るのかもね」

「そうだね、優しいもんね。ハルトさんって雪乃ちゃんや奈々枝ちゃん、それにミコちゃんは私の大切な友達だもん。雪乃ちゃん、ハルトさんの所に行こう」

今度は私が雪乃ちゃんの手を引つ張って走り出した。

「ボロ雑巾みたいだね、ハル」

「この頑丈な体が恨めしいよ。何百年ぶりかなこんな姿を晒したのは」

「早く起き上がりな、心配ばかりかけるんじゃないよ」

「相変わらず口の減らないご婦人だ。立ち上がればいいんだろ」

そんな事を言いながらハルトさんが壁で体を支えながらフラフラと立ち上がった。

「本当に馬鹿ばかりなんだから、ハルだつてとつくに気が付いていたんだろ」

「何をだ？」

「時雨と雫の関係だよ」

「さあな、もう暗いんだから帰ろうぜ。今日は疲れた。帰って眠りたいよ」

「これからがお前達の時間じゃないか」

「今日は勘弁してくれ」

お婆ちゃんと言い争いみたいにながらハルトさんは自分の足で歩いて行き何とか車に乗り込んだ。

「また、明日ね」

雪乃ちゃん達と校門で別れて、鳴海先生の運転で家に帰ってきた。家に着くとハルトさんはフラフラしながらも階段をあがり部屋に入るなりベッドに倒れこんだ。

背中から見える羽は無残にも引き千切られたままだった。

「良い子だ、良くここまで我慢したね」

お婆ちゃんが子どもをあやす様にハルトさんの頭を優しく撫でていた。

「栗、紅茶を入れてここに持って上がって来てくれないか。ここで話をしよう。その方が栗も安心しろ」

「うん、判った」

「それじゃ、私はこのお馬鹿さんの体でも拭きますか。栗ちゃんバケツと雑巾を貸してちょうだい」

「鳴海先生、それは酷すぎです」

「いいのよ、雑巾で。うふふ」

私はキッチンに鳴海先生はバスルームに向った。

私がお湯を沸かして紅茶の準備をして2階に上がると、鳴海先生がハルトさんの体を暖めたタオルで拭いていた。その体は痣だらけで痛々しいものだった。

「紅茶入れたよ」

「ありがとう」

ポットからカップに移しておばあちゃんと鳴海先生に渡す。

しばらく誰も喋らずに紅茶を飲んでいた。

ベッドに視線を移すとハルトさんのお腹が僅かに呼吸をしているのが見てとれた。

「さて、何から話せばいいかねえ」

「その前に、ハルトさんは大丈夫なの？ お婆ちゃん」

「かなり時間がかかるだろうね、今の状態じゃ」

「そんなに酷いの？」

「見ただる体の痣。あんな物さえ消えないんだ。血が足りないんだよ、ヴァンプの血力だからね。人も同じ様なものだけれど人は血液の30%を失うと生命の危機に瀕する。ハル達はアンデッドだから半分以上失っても死にはしないけれどね」

「アンデッドって何？」

「死にぞこないって意味さ」

「酷い言い方だね」

「それじゃ、寧ろ質問だ。どうすると人がヴァンプになるんだい？」

「えっ、それは吸血鬼に血を吸われた時じゃないの？」

「正解だ、それじゃ人狼や人魚にはどうしたらなれるんだい？」

お婆ちゃんに言われて初めて気が付いた。

人でないものにも大きな隔たりがある事を、そしてこの後もっと大切な事を気付くべきだと思い知らされた。

「まあ、メリットとデメリットは表裏一体だからね裏を返せば表なのさ」

「うう、難しい」

「簡単に言えばヴァンプは同族同士じゃなくても種族を増やせると言う事さ。他の種族は人間と交われれば力が弱まる。しかしヴァンプは違う、人間を同族にする事が出来るから力は弱まらない。更に同族の血を吸うことで相手の力を手に入れることが出来る」

「それじゃ、もし他の吸血鬼さんがハルトさんの血を吸えばハルトさんみたいな力を得る事が出来るの？」

「そう言う事になるね。しかし、どうしたものが何か血に代わる物でもあれば」

「輸血パツクとか？」

「そんな物は私等でさえも入手困難だ。ハルならともかく」

「それじゃ、他の吸血鬼さんはどうしているの？」

「基本的にそんなに沢山の血を吸わなくても生きてはいける。昔はどうだったか知らないけれど今は錠剤があるからね血液代わりの。でもハルの今の状態じゃ」

「それじゃ、ハルトさんが持っているカプセルは？」

私はハルトさんの上着のポケットからピルケースを探してお婆ちゃんに渡してみた。

「雫、お前なんでこれの存在を知っているんだ？」

「前にハルトさんが飲んでいたので、何で？」

私の言葉を聞いた瞬間、お婆ちゃんの顔が曇ってなんだか不安になった。

「雫、冷蔵庫に赤ワインがあるはずだ。グラスに入れて持ってきな」

「う、うん」  
言われるままにコップに入れてお婆ちゃんに渡すとカプセルを2つグラスに入れて掻き回し、ハルトさんの上半身を起こしてグラスをハルトさんの口に当ててゆっくり流し込むと少しずつハルトさんが飲み込んでいた。



「栗、ハルがこのカプセルを使うのを見た事があるんだね」

「うん」

お婆ちゃんの顔は相変わらず曇ったままでなんだか怒られているみたいだった。

「栗が気にする事は無いんだよ、私のミスだ」

「判るように説明して」

「仕方が無いね、ここまできたら。心して聞きな。これはアンデッドであるが故の宿命なんだよ」

「宿命？」

「アンデッドではない種族は好き嫌いはあるが人と同じ様な物を食べて生活する事が出来る。ヴァンプもある程度なら普通の食事で生活できるが唯一違う所がある。吸血衝動だ、この衝動を押えるのは並大抵の精神力じゃ打ち勝てない物なんだよ。そしてこの衝動は血液を違う状態で摂取していても起こる欲求なのだよ。それ故にあまり人との接触をしないヴァンプが殆どだ。秩序を乱さないためにね」

お婆ちゃんの言葉に雷で全身を打ち抜かれた感じがした。

私はハルトさんに対して何をしてきたのだろう。

そう思っただけで何かが崩れ落ちていく感じがした。

あの日。私が拗ねてハルトさんに甘えたあの時、ハルトさんは衝動を抑える為に私を遠ざけてあんなに苦しそうにして居たんだ。

だから私と一定の距離を置いたんだ。

それなのに私はハルトさんに近づこうとした。

ハルトさんを苦しめているとも知らずに。

ハルトさんは最初からこうなる事を判ってた、だから家に入ろうともしなかった。

それに私がハルトさんの正体をしれば拒絶すると思っていたんだ。

それなのに私は受け入れてしまった考えも無しに、そのうえ一緒に居たいと泣きながら懇願してしまった。

涙が溢れてくる、胸が苦しい。

それでもどこかで私はなんとか感情をコントロールしていた。

「雫だけの責任じゃない。同じ過ちを繰り返してしまった私に責任があるのだから」

「同じ過ち？」

「そう、私と時雨も同じ過ちを犯した。若さゆえにね」

お婆ちゃんは、大きく深呼吸をすると優しい目で私を見つめながら話し始めた。

月城の家は昔から人の世と闇の世を橋渡しするのを生業としていたんだ。

表向きは東北の旧家だったけれどね。

まあ、世界中に点在する連絡所みたいなものかね。

だから、そんな家に生まれた私と時雨は幼い頃から人では無い者を見てきた。

ハルもそのうちの1人だったんだよ。

とても優しくってね、幼い頃から大好きだった。

でも母の口癖は『ハルは鬼切りだからね』と言って一定の距離を置くように仕向けたんだよ。

「鬼切り？」

そう、ここ日本でハルの2つ名は『鬼切り』それはハルが持つている大太刀の呼び名だよ。

ハルはその太刀で人に仇なす者を裁いていた。滅すと言った方が良いかね。

「もしかしてあの刀の事？ それって殺してしまうと言う事？」

まあ、早い話がそう言うことさ。

時には同族さえもね、だからハルには日本以外でも色々な2つ名が付いている『黒き悪魔』『地獄の執行人』『死神』本人は気にしてはいないようだけどね。

「でも、同族って吸血鬼さんは不死身じゃないの？」

言っただよ不死身だけど死なない訳じゃないヴァンプだって血を全て失えば死んでしまう。

中には太陽の光を浴びれない体質の者も居る。

雫も見ただろ銀で傷つけば治りが遅い、それに一番簡単な方法は

ホワイトアツシユの杭を心臓に打ち込む事。

「それじゃ、あの刀も銀で出来ているの？」

銀の筈がないじゃないか、どう見てもあれは日本刀だよ。

どう言う経緯でハルが日本刀を手に行っているのかは私にも判らないけれどね。

「それは、シユヴァリエにまだ2つ名が無かった頃のお話よ」

その声は、紅茶を飲みながら静かに話を聞いていた鳴海先生だった。

昔話くらい昔の話。

東の外れの島国で起きた哀しいお話。

もう数百年も前の話よ。

私はまだ駆け出しで周りの仲間の足ばかりを引っ張っていた。

ある時、畏に嵌り人に捕まってしまったの、人魚の肉が不老不死の薬だと信じられていた為に。

でも、私が幽閉された大きな屋敷の人はとても優しい人ばかりだった。

大きなお屋敷には大きな池があつて、牢ではなくその池に私は入れられていたわ。

その屋敷には見た事も無い種族が沢山いたの。

恐らく屋敷の主人が保護していたのだと思う。妖あやかしと屋敷の人は呼んでいたわ。

そして、そんな屋敷の主人を疎ましく思っていた人間が居た。

それが私を捉えた人間よ。

しばらくすると屋敷の1人娘が行き倒れていた男を屋敷に連れて戻って来た。

その男は娘の手厚い看病のお陰で直ぐに男は動けるようになったわ。すると娘は嬉しそうに私の所にその男を連れて来たの。

私は驚きのあまり声が出なかったわ、だってその男は島国の衣装を着けていたけれど紛れも無いヴァンパイアだったから。

それが私とシュヴァリエの最初の出会い。  
そして彼はこう言った『やっと見つけた』と彼のその目はとても優しい目だった。

彼は何故か人とは一線を引いていたけれど屋敷に居る妖にはとても優しくかった。

そんな男が娘は気に入ったようで、いつも一緒に居たわ。  
でも、それは長続きしなかった。

娘に頼まれて男が連れれの者と近くの山に妖を探しに行っている時に  
奴らが来たの。

私を捉えた男とシュヴァリエの同族が、これが仕組まれたものだと  
その時気付いたの。

私を捉えた男はこの屋敷の主人が邪魔だった、それを利用してシュ  
ヴァリエの同族がシュヴァリエを抹殺しようと画策したのだと。

私を餌に嵌め、そして私を餌にシュヴェリエをおびき出しそして半  
殺しにして屋敷の娘に見つけさせる。

そうすれば娘は必ず屋敷に連れ帰る。

屋敷には私が居る、そしてシュヴァリエの目的は私の奪還。それを  
匿うと言う事は……

「彼らは屋敷を取り潰しハルを殺す名目を取り付けたんだね」  
お婆ちゃんが溜息をつきながら言った。

そう、あつという間だった。

屋敷の人間は皆殺し、そして娘は屋敷に戻って来た彼の目の前でヴ  
アンプにされてしまった。

「そんな……」

娘も何かを感じたのでしよう、自分が人でない者になってしまつと  
だから彼に頼んだ。

屋敷の守り刀を持ち出し自分を殺してくれと。

あの時の事は忘れたくても忘れられない。

シュヴァリエは涙を流しながら娘を抱きしめて刀を娘の背中に突き刺した。

刀は娘の心臓と彼の体を貫いていた。

そして彼が娘の首筋に優しく口付けをすると娘は嬉しそうな顔をしながら消えて行った。

その時の刀が後の『鬼切り』よ。

本当の名は『紅雀』悪しき者から娘を守る為だけに作られた業物。

シュヴァリエはその場で『紅雀』をベースにヴァンプになる事を拒んだ娘の血と自分の血で『鬼切り』を作り上げたの。

彼女を忘れない為に卑劣な同族を滅する為に、そして優しさを捨てた所為で彼の力は飛躍的上がった。

怪物や魔物に悪魔や死神と呼ばれるまでにね。

私は泣きながらハルトさんの過去の話を聞くのが精一杯だった。

「でも、久しぶりに会った時には笑顔で答えてくれたわね」

「時間が癒してくれたのだろう。それにハルは根っから冷血に徹するような事が出来ないだろう。そうじゃなきゃ日本の妖があんなになつくもんかい」

「それにシュヴァリエは日本が好きだしね」

「でも、辛い思いも沢山してきているんだよ」

それは、お婆ちゃんと私の本当のお婆ちゃんの話だった。

姉の時雨とは年子だったけれどよく双子に間違われたね。

母親でさえ間違えるくらいだったからね。

でも、出会ったばかりのハルは決して間違わなかった。

あの頃は楽しかったね、人も人で無い者も分け隔てなくハルは可愛がってくれた。

毎年の様に遊びに来てくれていたのが私達が大きくなるに連れて長い時間屋敷に滞在しなくなってきた。

それでも屋敷に来れば変わらず可愛がってくれたんだよ。

それにハルが作ってくれるお菓子が楽しみでね。

そう言えば林檎を使ったお菓子が多かったね。

秋口に屋敷に来る事が多かったからなのかも知れないけれど。

西洋のお菓子でそりや美味しかった。

その時に紅茶の入れ方なんかも教わったんだ。

そしていつしか淡い恋心が芽生えて、そんな年頃になるとハルは一定の距離を取るようになった。

私達も母には言われていたけれど恋心には勝てなかった。

今、思えばハルには酷な事をしていたと思うよ。

時を同じくして人狼の青年も良く屋敷に立ち寄ってくれていたね。それが大上だった。

私達もハルもそんな事は気にしなかった。

だってそうなる幼い頃からそんな環境で育ったのだから。

でも、大上は時雨に憧れを抱いていたのは私には判った。

だけど、私も時雨もハルしか目に入っていなかったからね。

「恋は盲目ですね」

「ラブ イズ パワーと言ってくれないかい」

「うふふ、相変わらずですね」

でも、別れは突然訪れた。

冬が近づく季節だったね、時雨はあまり体が丈夫じゃなかった。

季節の変わり目と言う事もあって体調を崩していて、そんな時にハルが屋敷にやってきたんだ。

そして、母の頼みで時雨を家で寝かせたまま3人で出かけたんだ。

ほんの1時間くらいだったと思う。

屋敷に戻ってきて最初に異変に気付いたのはハルだった。

真っ直ぐに時雨の部屋に駆け出した。

部屋に入り襖を閉めると誰も入らないようにと言って母ですら部屋に入れなかった。

しばらくして母だけが呼ばれ、それからまたしばらくするとハルだけが部屋から出てきた。

だけど、何を聞いても喋らなかつたよ。

ハルは虚ろな目をして左手首に包帯が巻かれて血が滲んでいた。そして、私の頭を撫でて額に軽くキスをして屋敷を出て行った。

私は咄嗟の事で立ち尽くしてしまい、それが別れの挨拶だと気付きハルの後を追いかけたけれどハルの姿は何処にも見当たらなかつた。それ以来、ハルは私達の前から姿を消したんだ。

母からその後で何が起きたのか聞いたよ、物取りの仕業が判らないけれど時雨が襲われて大怪我をした。

それをハルが治してくれたって。

それから数年後、時雨は普通の人と結婚して雫の母親を産み。

亡くなってしまった、元々体は丈夫じゃなかつたからね。

そして私は忘れる事が出来ずに結婚もしなかつた。

恐らく、あんな事が起きなくてもハルはどちらも選ばなかつただろうけれどね。

「でも、それはシユバリエに聞いてみないと判らない事なのじゃ」

「判るんだよ、私と時雨には。ハルは独りで居る時は寂しそうな目で海を見ていた。あの目は何もかも諦めた目だ。生きる事さえもね」

「何でななんだろう、最後の一步を踏み出さない。まさか女嫌いとか」

「そんなんじゃねえよ」

突然、ハルトさんの声が部屋に響いた。



突然、ハルトさんの今まで聞いたことのない様な声がして私の心臓が飛び跳ねた。

お婆ちゃんも鳴海先生も驚いてベッドに寝ているハルトさんを見ていた。

「そんなんじゃないよ、400年以上生きてきてこんな事言えば笑われるかも知れないが。俺は人間の女が怖いんだ」

「ハル、お前。それを本気で言っているのかい？」

「俺が、今まで嘘を付いた事があるか？ 糞」

「そうだね、ハルは決して私には嘘は付かない。だが原因は判っているんだろっ」

「子どもの頃に顔見知りの女の子に面と向って言われた事があるんだ。ただ仲良くなりたくて話しに加わっただけなのに『気持ち悪いと』拒絶された。俺自身を否定された気持ちになったよ。あの時のあの女の子の顔は今でも頭から離れない。子どもが故に真っ直ぐな感情が現れていた憎悪に似た嫌悪感に満ちた顔だった」

「そんな事で？」

「そんな事？ それで十分だろヴァンプとして嫌われるなら仕方が無いが、俺はただの人間の子どもだったのだ。まあその反動であまり人には言えない様な付き合いを繰り返した事もあるけどな」

「1つ聞いて良いか？ シュヴァリエは何故眷属を作らない？」

鳴海先生が確信をつくくと、ベッドで横になったままで話していたハルトさんが押し黙ってしまった。

そして何かを考えるようにして話し始めた。

「俺と居れば必ず不幸になる。俺は独りで居るべきなんだ」

「それじゃ、何故。私や時雨に優しくした？」

お婆ちゃんが少しだけ声を荒げた。

「月の者だからだよ」

「月の者だから？」

「人でない俺を始めて受け入れてくれた女の子は月夜見 雀と名乗ったんだ。その女の子の血は俺の体の中にある。そして、彼女と同じ……が……」

「ハルト？ 何が同じなんだい？ 寝たのかい？ しょうがない奴だ」再びハルトさんが眠りに付いて沈黙が流れた。

そして私はハルトさんの辛い過去に押し潰されそうになり体から力が抜けてしまっていた。

「雫は、どうしたいんだい」

どの位時間が経ったのだろう、お婆ちゃんの声に私の体がビクンと反応して心が締め付けられる。

「私は……」

言葉が続かなかった。

ハルトさんの辛く哀しい過去そして心の傷は想像を遥かに超えていた。

哀しい別れを繰り返して。

それでも私の中には揺るぎない物がある、だけど……

その時、私を温かいものが包み込んだ。

鳴滝先生だった、私を優しく抱きしめてくれた。

まるで母親が子どもを抱くように。

「雫、自分の思った通りに生きなさい。自分の心に正直にね、後悔しないように」

涙が溢れ出して心が温かくなる。

「雫が決める事だよ。私は雫もハルトも助けてやる事が出来なかったからね」

「お婆ちゃん……」

お婆ちゃんは知っていた。

私が苛められている事を、そして私が願っていた事も知っているんだろうと思うと胸が締め付けられた。

どんな思いで私を育て見守ってきたのだろう。

「雫、お前の名前は私達の希望なんだよ」

「私の名前？」

「そう、雨垂れ石を穿つ。一雫ひとしずくの水でも岩を砕き。そしてどんな大河でも始めは一雫ひとしずくから始まりそしてやがて海になる」

「わ、私はどんな事があってもハルトと一緒に居たい、どうしようもないくらい大好きなの！私をどん底から救い上げてくれた。私に生きる勇気を教えてくれた」

感情のコントロールを失い、私は祖母に泣きついた。

幼い子どもが泣きじゃくるように。

「初めて、本当の気持ちと言ってくれたね。辛かったね、ごめんよ」  
お婆ちゃんが優しく頭を撫でてくれる。

私は返事も出来ずに首を横に振る事しか出来なかった。

窓の外、冬の夜空にオリオン座や昴が輝いている。

私が一頻り泣いて落ち着いた頃、お婆ちゃんに夕食の準備をする様に言われたの。

それで、私は鳴海先生と1階のキッチンで夕食を作っていた。

「でも、雫ちゃんは強いよね」

「そんな事ないですよ」

「そんな事あるのよ、だってシュヴァリエが言ってたもの」

「は、ハルトさんが？」

「そ、私。焼きもち焼いちゃった。あの馬鹿は気付いていないかもしれないけれど、私と話している時にいつも雫ちゃんの話してたもの」

ハルトさんが私の話を、そう思っただけで顔が赤くってしまっと思わず話題を変えた。

「吸血衝動ってどんな感じなんだろう」

「人で言う眠気みたいな物だと聞いたことがあるわ」

それを聴いた瞬間。どれだけ耐えることが困難なのかを実感して、クールダウンする。

「眷属ってなんですか？」

「従者、下僕？ 違うわね。お嫁さんかな」

「お嫁さんですか？」

「そう、ヴァンプが血を吸うのには2つの意味があるの。1つは食欲の為、そしてもう1つは契約の証。少しでも血を吸われればヴァンプになってしまう。ヴァンプにしないためには全ての血を吸い尽くせば良い。そして眷属つまり同族として契約してからは、そうね愛する人と結ばれるって事かしら」

「愛する人と結ばれる？」

「そう、栗ちゃんも子どもじゃないんだから判るでしょ」

鳴海先生が悪戯っ子みたいな笑顔で私の顔を見ていた。

そ、それって……

頭から湯気が立ち上り顔が真っ赤になって体から力が抜けてお玉を持ったまましゃがみ込んでしまった。

「うふふ、栗ちゃんはやっぱり可愛い。シュヴァリエが大切にしたい気持ちが良い判るわ」

追い討ちをかける様な鳴海先生の言葉に更に赤くなって俯いてしまった。

「栗ちゃん、まるで真っ赤な林檎みたいよ」

雫と水蘭が部屋から出て行く気配を感じる。

しばらくして雫が声をかけてきた。

「いつまで寝た振りしてるんだい。ハル？」

「そんな振りしているつもりは無いが」

「お前の気持ちを聞かせな、ふざけた事を言ったら承知しないからね」

本当にこの婆さんは俺以上に腹黒い。

そもそも、この部屋で長々とあんな話する必要ないだろう。

態々、俺の過去を雫に聞かせて。

散々、雫の気持ちを煽って雫の本当を俺に聞かせて。

つくづく、雫には敵わないと思った。

「俺にどうしろと」

「本当に張り倒すよ、ハル！」

俺が口に出すまでも無く判っているはずだ、そう思い雫を見ると背中に真っ黒なオーラを背負っていた。

「大切にしたい、これが本音だ」

「それなら、どうして距離を置く？」

「俺は、本来この時間にいるはずが無い者なんだぞ、いつか必ず元の時間に戻る時が来る。俺の10年なんてほんの数日みたいなものだ。でも人の10年は違うだろう」

「それじゃ、ちゃんと契約して」

「俺と同じ思いを雫にしると？ 雫が判らない訳が無いだろ。雫はまだ高校生だぞ」

「……………」

雫は何も答えなかった。

月の者である以上、闇の者がどう生きてきたか知らない訳が無いのだから。

そして俺の意識が途切れた。

「ハル！ ハル！ 目を覚ましな」

どれだけ気を失っていたのだろう、微かにあの香りが鼻腔を掠める。雲の声で目を覚ますと心配そうに雲が俺の顔を覗き込んでいた。

「元の時間に飛ぶ前に、危うく違う所に飛びそうになったよ」

「ハル、お前。本当に大丈夫なのか？」

「ギリギリ大丈夫かな。俺の血がどんなに死にたがっても、雀の血がそれを許してくれないからな」

「雀？ ハルを初めて受け入れてくれた雀はどんな娘だったんだい？」

「小柄な優しい娘だった。そして雀からはいつも良い香りがしていた」

「いい香り？ どんな香りなんだい？」

「不思議な香りさ、そして次に同じ様な香りに出会ったのも日本だった」

「日本？」

俺が遠い目をするとう雲は怪訝そうな顔で俺を見ていた。

「驚いたよ、双子みたいな姉妹に出会った時に感じたんだ。雀と同じ香りがすると。そして何度と無くその屋敷に通う内に気付いたんだ。林檎の香りと良く似た香りだって、甘いようなそれでいてどこか爽やかな香り」

「ハルはそれで必ず秋口に来てたんだね」

「大好きな香りだからね。そして雫と出逢うきっかけもあの香りだった、不思議な話だろ」

「もしかしたら」

「そうかも知れないが、それは誰にも判らないよ」

## レアチーズケーキ・1

翌日、私はお婆ちゃんに学校を休むように言われてしまった。

ハルトさんも元気になったみたいで普段と変らなく見えた。

「ハルト、お前も今日は大人しくしているんだよ」

「大人しくも何も、今は人と同じレベルだ。何も出来やしないさ」

「粟、いいかい。この馬鹿が無茶しないように監視しておきな。いいね、無茶したら必ず教えるんだよ」

「はい」

「くそ婆が、朝飯まで作らせて、大人しくしているなんてよく言うよ」

「ハルト？ 何か言ったか？」

「別に」

3人で朝食を済ませるとお婆ちゃんは自分の家に戻った。

鳴海先生は昨夜の内に家に帰ってしまった。

泊まってもらってもっと沢山お喋りしたかったのに『レディーが前  
の日と同じ服装で仕事には行けないの』って言いながら帰ってしまった。

「暇だな……」

片づけを済ませてテーブルに突っ伏しているとハルトさんが声をかけてきた。

「粟、出かけるぞ」

へえ？ ハルトさん？

今、何て呼んだの？

頭の中は真っ白になり顔は真っ赤になってしまった。

「置いて行くぞ」

「で、でも、お婆ちゃんに大人しくしているって」

何とか平静を保って返事をするけれど、心臓がドキドキいつて今に

も飛び出しそうだった。

「外出禁止とは言われていない、無茶をするなど言われただけだ」  
ハルトさんはそう言うともう立ち上がっていた。

「ま、待って。着替えてくるから」

「そのまま良いだろう、買い物に行くだけだ」  
「嫌！」

そう言い放って2階の自分の部屋に駆け込んで気持ちを落ち着かせる。

ハルトさん私の事を『雫』って呼んだよね。

聞き間違いじゃないよね。

そしてお婆ちゃんと一緒に寝ている時に言われた言葉を思い出した。  
『時間は巻き戻せないんだよ、それとハルトとの別れはそう遠くない  
うちに必ず訪れる。突然にね』

私は深呼吸して着替えを済ませて階段を駆け下りた。

私とハルトさんは初めてデート？　した時と同じ様に街中をぶら  
ついていた。

「なあ、雫。本当に着替えたのか？」

「ハルトさん。女の子に対して凄く失礼な事言っている自覚はある  
んですか？」

「もちろん。雫はとても可愛らしいのに地味な服しか着ないからな」  
「可愛くなんかありません！」

ただでさえ名前を呼ばれることに慣れなくて恥ずかしいのに、可愛  
いなんて言うもんだから真っ赤になって俯いてしまう。

そう言えば初めて出掛けた時にも言われたけれど、私は自分が可愛  
いなんて思った事は一度も無かった。

「小さいから子どもぽいつて事ですか？」

「可愛いは可愛いだよ、俺は雫を子どもぽいなんて思った事は一度  
も無いよ」

そう言っってハルトさんが私の手を取って1軒のお店の中に入って行



った。

「は、ハルトさん？　ここで何を？」

「雫は美容院を知らないのか？」

「そ、そうじゃなくって……」

問答無用で座らされて、ハルトさんは美容師のお姉さんと何かを話していた。

そしてあつという間に髪の毛をばつさり切られてしまった。

髪の毛は女の子の命なのに、首筋がスースーするしそれになんとか  
恥ずかしい。

「彼氏さんの言ってた通り、軽くシヨートにして癖毛を生かしたら  
凄くいい感じ。キュート&クールね。前髪は長さを残しているから  
大人っぽく仕上がってるからね。お似合いよ」

「うう……恥ずかしい」

今まで美容院なんか殆ど来た事が無かった、自分で適当に切ってた  
から。

だからお似合いと言われても自分じゃ判らなかった。

「雫、行くぞ」

「う、うん」

次に連れて行かれたのはセレクトショップだった。

店内を回りながらハルトさんが次々に私に洋服を手渡してきた。

「ど、どうするんですか？」

「試着してみる」

「嫌だつて言ったら怒ります？」

「怒られたいか？」

「嫌です……」

渋々とフィッティングルームに入って試着をする。

そんなに私の格好つて変なのかな連れて歩きたくないくらい。

考えれば考えるほど凹んでくる、そりゃ確かにハルトさんと一緒に  
いるとチンチクリンかもしれないけどさ。

ハルトさんがチヨイスしたのはダブルガーゼのパープルチェックの

ワンピースとベージュのパーカー付きのショート丈の軽いコートだった。

あれ？ 普段着ているものと色は違っけどあまり変らない気がする。

「これで、良いですか？ レギンス穿いたままだけど」

「それじゃ、これ履いて」

ハルトさんが今度もって来たのはポンポンが付いた柔らかそうなキヤメル色のブーツだった。

「ん〜良い感じだな」

ハルトさんはそう言って店員さんに何か一言告げてレジカウンターに行ってしまった。

「ハルトさん？」

「それじゃ、失礼します」

女性スタッフがタグを全部取って私が着ていた服を紙袋に綺麗に畳んで入れて渡してくれた。

「あ、ありがとうございます」

狐につままれた様にポカンとしているとハルトさんはとっとと店を出て行ってしまった。

「もう、待つてください」

「さあ、メインの買い物に行こうか」

「へえ？ 私はオードブル？」

## レアチーズケーキ・2

あれから少し街をブラブラしてからファーストフードでお昼を食べ  
て。

ショッピングセンターで買い物をして帰ってきた。

どこを歩いてもなんだかされ違う人が振り返って恥ずかしくって凄  
く疲れた気がした。

ハルトさんは、なんにも気にならなかったみたいで。

今はキッチンで何かを作っていた。

「何を作っているんですか？」

「お菓子」

「お菓子って色々あるじゃないですか」

「レアチーズケーキ」

「でも、これ林檎ですよ」

「林檎のコンポート」

「それじゃ、林檎のレアチーズケーキなんですね。ハルトさんって

林檎好きですよ」

「べ、別に」

うふふ。今、少し動揺した。お婆ちゃんの言ってた通りだ。

女の子の髪の毛を勝手に切った罰です。

昨日の夜、お婆ちゃんと寝る時にお喋りしながらハルトさんの事を  
教えてもらったの。

「林檎入りのレアチーズケーキか。白くってスベスベで柔らかく  
って林檎の香りがして美味しそうですね」

クリームチーズが入っているボールを覗き込みながら言うとハルト  
さんが手を止めて私を睨みつけた。

「雫、婆さんに何か言われたら」

「別に」

「却下」

ハルトさんがそう言ったと思ったら冷蔵庫から何かを取り出して林檎の入った鍋に注ぎ出した。

「な、何を入れたんですか？」

「赤ワイン」

「白くなくなっちゃった。そう言えばハルトさんは何でカプセルを赤ワインに入れて飲むんですか？」

「あのカプセルは血の代用品だ水に入れれば血液と同じ様になるが、そんな物をゴクゴク飲まれたら気持ち良いか？」

「うげえ、ゴメンなさい無理です」

「冗談だ、ただ俺がワインが好きなだけだ」

「意地悪」

「お前もな」

うう、やっぱりハルトさんには敵わない……

ハルトさんはコンポートを作っている間にビスキュイ生地を焼き上げてしまった。

隣で見ているととっても手際が良かった。

「どこで料理を覚えたんですか？」

「世界中、色んな場所で」

答えになつてないけれどそれが本当なのかもしれない。

ハルトさんは何百年も世界を回っているのだから。

それに私はハルトさんが料理をするのを見ているだけで楽しかった。林檎のコンポート2個分を8等分にして、3個分をピューレにしてから鍋に入れて温めてゼラチンを溶かしている。

「見ているならこれを人肌に冷ましてくれ」

「えっ、良いんですかお手伝いして」

「構わない」

私がピューレを冷ましている間にハルトさんはクリームチーズをホイッパーでクリーム状にしていた。

その中に少しずつ冷ましたピューレを合わせていく。

今度は生クリームを少量の砂糖を入れて6分立てにした。

「生クリームはどうするんですか？」  
「クリームチーズとあわせて型に流すだけだ」  
型にビスキュイ生地を敷き詰めて半分くらいチーズの生地を流し込んで、8等分にカットしたコンポートを綺麗に輪になるように並べてその上に残りの生地を流し込んで冷蔵庫に入れた。

すると今度は、コンポートの煮汁に赤ワインを入れて煮詰め出した。  
「今度は何を作るんですか？」

「ソースだ、林檎の赤ワインソース」  
しばらくするといい匂いが部屋に立ち込めた。

ハルトさんは片づけを済ませてリビングのソファに倒れこむように座った。

「紅茶飲みますか？」

「ああ」

私が紅茶を入れて2人で飲み始めると、ハルトさんはカップをテーブルに置いてソファで眠り始めてしまった。

ハルトさんの寝顔って凄く可愛んだ。

私は髪を切った事などすっかり忘れていた。

夕方になり私の家には雪乃ちゃん、奈々枝ちゃん、ミコちゃんが来て。ハルトさんはキッチンで紅茶を入れていた。

何でこんな事になっているかと言つと。

ハルトさんの寝顔を見ながら私も寝てしまい、何かの電子音で目が覚めたの。

私が目を覚ますとハルトさんは先に起きて何かを弄っていたの。

「なんの音ですか？」

「携帯の目覚ましだ」

「どこかへ行くんですか？」

「雫と一緒に学校へ、あいつ等に元気な姿見せないと心配しているだろうからな」

「へえ？ あっ！ はい！」

ハルトさんの車で学校に向かい下校してくる雪乃ちゃん達を私は校門で待つている。

なんだか周りの視線が怖かった。

みんなが遠巻きに私を見ている気がした。

雪乃ちゃんを見つけて小さく手を振ると不思議な顔をして近づいてきた。

「も、もしかして栗なの？」

「そうだよ」

「えっー！」

雪乃ちゃんの絶叫が校舎にこだました。

「どこかの雑誌のモデルさんかと思っちゃった。凄く可愛いよ、めちゃ似合ってる」

「そ、そんなに驚くほどなの？」

「うん、びっくり」

しばらくすると奈々枝ちゃんとミコちゃんがお喋りをしながら歩いてきた。

雪乃ちゃんに言われた通り何も言わないで小さく手を振ると怪訝そうな顔をしていた。

「奈々枝ちゃん、ミコちゃん。無視しないで」

「へえ？ 栗？」

溜まらずに声をかけると奈々枝ちゃんは雪乃ちゃんと変わらない反応だった。

ミコちゃんは啞然として口をパクパクしていた。

そんな事があつてハルトさんの車に乗って家に皆で帰ってきたの。

「もう、みんな酷いよ。1日で私の顔を忘れちゃうんだから」

「酷いのはどつちだか、1日でそんなにイメージチェンジしてモデルさんみたいになつたのは誰？」

「うう、奈々枝ちゃん。仕方が無いじゃん、ハルトさんに無理矢理美容院に連れて行かれたんだから」

「それで、無理矢理服も買ってもらってデートしてたんだ。私達は心配してたのに」

「雪乃ちゃんの意地悪……」

「でも、雫たん。今の方が似合ってるよ。大人っぽい」

「ミコちゃんまで」

何でこんなに責められないといけないんだろう、全部ハルトさんの所為なのに。

「で、私達になんか一言無いのかな？」

「ゴメンなさい、心配かけて」

「仕方が無いか、許してあげよう。月城先生も元気になったみたいだしね」

そんな事を話しているとハルトさんが紅茶を入れて運んで来てくれた。

それは、アップルティーとあのチーズケーキだった。

「これは、先生からのお詫びのしるしだ。心配かけてすまなかったな」

「うわあ、こんなアップルティー飲んだ事が無い、凄くいい香り」  
奈々枝ちゃん驚きすぎ。

でも本当に良い香りがして美味しいかも。

「先生、このケーキは何のケーキですか？」

「これは、赤ワインと林檎のレアチーズケーキだよ。ソースは赤ワインと林檎のソースだ」

「このケーキも美味しいよ。ミコもたべてみな」

「うん、本当に美味しい」

「本当に、奈々枝とミコは仲が良いよね」

「何を言ってるかな雪乃も雫もみんな仲がいいじゃん」

ハルトさんを見ると嬉しそうに優しい視線で私達を見ていた。いつまでもこんな幸せが続いたらいいな。





## あの日

翌日、キッチンから音がして2階までいい匂いが上がってきていた。「今、何時なんだ？」

携帯で時間を確認すると、起きるにはまだ早い時間だった。

それでも体を起こして下に降りた。

「ふあゝ、こんなに早く何をしているんだ？」

「おはよう、ハルトマンさん？ 挨拶が先でしょ」

「おはよう」

ハルトマンさん？

そして雫の声が異様に低い、朝から雫が機嫌が悪い理由は判らないが……

「朝食の準備です。ハルトマンさんが来る前まではこの時間に準備していたんです」

「そうか。で、雫は何が機嫌悪いんだ？」

「ハルトマンさんが勝手に切った髪が纏まらないんです。だから短い髪は嫌なのに……」

俯いて口を尖らせて、雫が伏し目にして拗ねていた。

まあ、俺が切った訳ではないが俺が美容院に無理矢理連れて行った訳だし責任があるのだろう。

「毎朝どこで髪の毛のセットをしているんだ？」

「あそこです」

雫が指差す方を見るとリビングのテーブルに鏡や櫛、ムースやワックスが置かれていた。

「今、髪には何か付けているのか？」

「何も。決まらないから洗って乾かしただけです」

「ちよつと来い」

「へえ？ や、止めてください、恥ずかしいから」

「暴れるな」

雫を抱き上げてリビングに行き、ソファーに座り俺の膝の間に雫を座らせた。

「何を真っ赤になっているんだ？」

「馬鹿……」

「ほら、鏡を見る。美容師の説明聞かなかったのか？」

「あの時はいきなり髪を切られて……」

「こつやってクリームタイプのワックスを大まかにつけて、軽く握るようにしてふんわりとさせたら毛先を軽く捻って束感をつければ出来上がり。トップが落ちてきたら軽く握るようにすれば直ぐにふわつとなる。これで良いかな？」

「う、うん。ありがとう」

「これからは自分で出来るな。この髪型が気に入ったのなら同じ美容院に通う事だな、あそこは中々腕が良さそうだ。ちゃんとニュアンスショートで言うんだぞ」

その後、直ぐに食事をすると雫は学校に行ってしまった。

送ろうかと聞いたが、いつまでも甘える訳にはいかないし他の生徒に示しがつかないからと断れてしまった。

仕方なく少し時間を遅らせて家をでることにした。

校門の手前で雫を追い越して車を駐車場に止めて車から降りると、雫がみんなの視線に気付き恥ずかしそうに俯いていた。

その横をクラスの女の子が声をかけて通り過ぎていくのが見えた。

「姫宮さん、おはよう。どうしたの？ イメチェン？ 凄く可愛いよ」

「あ、ありがとう。うう、恥ずかしいよ。何かみんな私を見ているし」

「ええ、そりゃそうだよ。姫宮さん、凄く可愛くなったもん」

そんな声が聞こえてくる。

今度は数人の男子が駆け寄ってきた。

「ひ、姫宮さん。おはよう、一昨日はゴメンなさい。怪我は大丈夫

だったの？」

「う、うん、大丈夫。少しだけ怪我したけどたいした事ないし月城先生が手当てしてくれたから……」

「あのさ、その……」

姫が俯いて下唇を噛み締めて鞆を両手で持ち、その手に力が入っている。

あまりにも可哀相なので仕方なく声をかけた。

「姫、おはよう」

「つ、月城先生……おはようございます」

男子生徒の顔が一瞬、強張ったのを見逃さずに畳み掛けた。

「俺は姫の叔父として姫が誰と付き合おうが構わないが、後ろの3人が何て言うかな？」

男子生徒達と雫が振り返るとそこには、もの凄い形相で黒い物が背中から立ち昇っている女の子3人が立っていた。

それをみた男子生徒達は蜘蛛の子を散らすように昇降口に駆け込んでしまった。

「雪乃ちゃん、奈々枝ちゃん、ニコちゃん。おはよー」

「おはよう。私達も雫が誰と付き合おうと構わないからね」

「奈々枝ちゃん？」

「私達は月城先生さえ居てくれたらそれで良いもんね」

「うん！」

「はい！」

「月城先生の事は私達に任せてね」

「えっ？」

雫の瞳が揺れている、紺野の顔を見ると少しにやけていた。

「雫は他の人を探してね」

「だ、駄目！」

「なんで、雫がそんな事言うの？」

「私はハルトが、ゴニヨゴニヨ……」

なんだか雲行きが怪しくなってきたので早々と逃げ出す事にした。

「先生は、昨日の報告と説明があるから先に失礼する。ホームルームに遅れるなよ」

「あつ、逃げた」

そんな声が聞こえてくるが気にせず逃げ出した。

数日もすると雫も慣れてきたのか落ち着きを取り戻していた。

友達も増えて今も校庭ではしゃぎまわっている。

それを職員室の窓から眺めていると不意に後ろから声をかけられた。

「雫ちゃん、変ったわね。生き生きとしている」

「そうだな、これからも頼んだぞ水蘭」

「なんで、そんな言い方するの、シュヴァリエは」

「お前も、知っているだろ。俺がここに居るのは不自然な事なんだよ」

最近、溜息をつく事が多くなっていた。

「それでも出会った。出逢えたそれで良いじゃない。今の雫ちゃんは幸せそうなもの」

「でも、別れはそう遠くないはずだ。そして10年後の世界では俺の側に雫はいない」

「もし、もしもそうになった時は探しなさい。どんな手を使ってもいいわね。それまでは頼まれてあげる」

「10年後か……俺らの10年なんて数日みたいなモノなのにな。雫は10年後どう変っているんだろうな」

「大人のレディーに私がしておくわよ」

そんな話をしていると雫が俺達を見つけて嬉しそうに両手を思いっきり振っていた。

それから数日すると、水蘭から落ち着きが無くなった。

落ち着きが無くなったと言つより怯えている感じさえ見てとれた。

その日も放課後に水蘭と他愛のない事を話していると喧嘩になりそうになった。

「水蘭、最近のお前は変だぞ」

「良いわよね、シユヴァリエは。雫ちゃんとラブラブで」

「あのな、何をイライラしているんだ？」

「判らないのよ何でか自分でも、ただ胸騒ぎがするの」

「胸騒ぎ？ 人魚の胸騒ぎなんて聞いたこと無いぞ」

「だから、イライラするんじゃない。こんな事初めてなんだから」

その時、地鳴りがしたと思った瞬間、校舎が大きく揺れた。

窓ガラスがガタガタと音を立てた。

咄嗟に、近くにあった小型のテレビを付けるとテロップが流れた。

『地震速報 綾音島 震度5……島 震度4 震源地 綾音島南西

沖……』

「でかかったな、雫は大丈夫かな」

そう言つて水蘭の顔を見ると真つ青になり震えていた。

「どうしたんだ水蘭？」

「海から何かが来る。大きな何かが、逃げてハルトマン！」

水蘭の言葉を聞いた瞬間、頭の中で俺がタイムスリップしたあの夜、

車の中で何気なく聞いていたラジオが流れた。

『今の地震、大きかったですね』

『そう言えば、もう直ぐで10年ですね。綾音島南西沖地震の津波

で甚大な……』

周りから音が消え。走り出しながら叫んでいた。

「津波が来るぞ！ 逃げろ！」

あらん限りの力で走り、車に飛び乗り急発進させる。

雫を守る為に。

ちょうど雫の屋敷の前に来た時、車が不自然な挙動をし始める。

後ろを振り向くと既に数メートルの水の壁が迫っていた。

水の壁に飲まれる辛うじて車は濁流にもまれながらも浮いていた。

そして目の前で雫の家が大きな波に飲み込まれた瞬間、俺の視界が

ら光が消えた。

どの位、時間が過ぎたのだろう。

気が付くとハンドルに抱きつくような姿勢で気が付いた。何故かライトに照らされて見える目の前にはコンクリートの壁、そしてナトリウム灯のオレンジ色の明かりに包まれている。

「ここは……」

車から降りると外は土砂降りの雨が降っていた。

音が蘇る、遠くでサイレンの音がする。辺りを見渡すとそこは、俺が飛ばされた日の深夜の環状線だった。

「栗……」

覚悟していたとはいえあまりにも突然の別れに俺は膝から崩れ落ちた。

滝の様に降る雨が情け容赦なく俺の体を打ち付けていた。

## あの日から

校門で雪乃ちゃんや奈々枝ちゃん、それにミコちゃんと別れて家に向っているとき名前を呼ばれた。

見上げるとお婆ちゃんが2階から手招きをしているのが見える。

「もう、しょうがないな」

そう言いながらも私はお婆ちゃんの家玄関に向って石の階段を駆け上がった。

「今日は、学校楽しかったかい？」

「うん、最近は友達も沢山できたしね」

「そうかい、そりゃ良かったね。それに雫はなんだか綺麗になったしね。恋をしている証拠だよ」

「もう、お婆ちゃん。からかわないで」

顔が赤くなるのが判ったが恋をしていると言われてなんだか嬉しかった。

「可愛くて大人っぽい髪型になったね」

「えっ？ 本当？ ハルトさんが美容院のお姉さんに頼んで切ってもらったんだ」

「この頃は口を開くとハルト、ハルトだね」

「もう、そんな事ないもん」

でも、本当に幸せだった。

ハルトさんと出会うイジメや嫌がらせがなくなって、友達が増えて生きていく事が楽しくなって少しだけ大人になった気がした。

それよりも大好きなハルトさんと一緒に居られるのが何より嬉しかったし幸せだった。

「雫！」

お婆ちゃんの声で我に返った瞬間。

ガタガタと家が大きく揺れ。

窓ガラスが割れ洋服ダンスの上の物が落ちてきた。

「お婆ちゃん、怖いよ」

「とりあえず、外に出るよ。雫」

「うん」

揺れが収まるのを待つて、お婆ちゃんの手を握りながら恐る恐る2階から降りて玄関を開けて外に出る。

「ハルトさん大丈夫かな」

「大丈夫さ、ハルトは不死身だよ」

それでも気になり学校の方を見ると、ハルトさんのミニ・クーパが走ってくるのが見えて手を振った。

「ハル……」

呼び声は声にならなかった。

目の前でハルトさんのミニ・クーパが濁流に飲み込まれていく。

体から力が抜けてしゃがみ込みそうになると、お婆ちゃんが手を引っ張った。

「津波だ。雫！ 2階に上がるんだ」

お婆ちゃんが叫んで顔を上げると目の前に水の壁が迫っていた。

気が付くと、目の前にはお婆ちゃんの心配そうな顔が見えた。

体を起こして周りを見るとそこはお婆ちゃんの家近くにある高台に立っている小学校の校庭だった。

「シーランが助けてくれたんだよ」

「えっ、鳴海先生が？」

鳴海先生はお婆ちゃんの横に座っていて、タオルで顔を拭いてくれた。

「先生、雪乃ちゃん達は？」

「みんな無事よ、心配しないで」

鳴海先生が優しい目で答えてくれた。

混乱している頭の中で濁流に流されていくハルトさんの車が浮かんできた。



「ハルトさんは？ ハルトさんは無事なの？」

私の質問に誰も答えてはくれなかった。

「今、大上先生が探しているからね」

「そんな……」

体から力が消えて、何もかもが真っ白になった。

ただ止め処もなく涙だけが溢れ出した。

あれから何日も何日も探し続けた。

でも見つけれなかった。

そして涙は枯れ果てた。

しばらくして雪乃ちゃんや奈々枝ちゃんにミコちゃんは生まれ故郷に帰り。

私も祖母と島を離れた。

そして今年もここに来た。

これで何回目なのだろう。

あなたの名前が掘り込まれている慰霊碑の前に来たのは。

島では津波の傷跡など全く判らないほどに復興をとげて変ってしまった。

今では鳴海先生も大上先生もここには居ない。

10年前に私が通っていた水乃瀬高校は校舎は当時のままだけど、今は可愛らしい後輩達が毎日を謳歌している。

そして、今。

あなたに初めて出会った場所にいる。

この辺りだけは当時の面影を残していた。

慰霊碑に彫られたあなたの名前に会ってから学校に行き、ここに来るのが毎年の私の楽しみ。

それだけを楽しみに生きてきた。

あの日から私の時間は止まってしまった。

北風がすり抜けキビの葉がザワザワと音を立てた。  
そう言えばあなたと出会った日もこんな北風が吹いて鉛色の空が広がっていた。

あなたはどこで私を見つけたのかしら。

不意にそんな事を思っただけを見渡すと、幼い頃に祖母に連れて行ってもらった街が見渡せる山の上にある公園が目に入った。

「気持ち良い！」

街が眼下に広がってその向こうにはどこまでも青い海が続いている。大きく息を吸って伸びをした。

これで終わりにしよう、そう思い公園まで来てみた。

あの日、あなたが飛ばされて来たという10年後の世界に私は独りで居る。

もし、もしも元の時間に戻ったとしたらあなたも独りで居るのだろうか。

そんな事を考えていると少し離れた公園の駐車場に可愛い丸みを帯びた車が1台止まった。

「うふふ、可愛いらしい新しいミニ。それも緑色、なんだか不思議」

終わらせる為にもう一度だけ街と海を見渡して、振り返るとそこには1人の男の人が立っていた。

黒いダウンジャケットの襟元から黒いパーカーのフードを出して。

黒いジーンズに黒いハイカットのスニーカーを履いて。

背は180センチ位だろうか。

そしてとても優しい声でした。

「姫は成長する気が無いのか？」

抑揚が少ないけれど優しい声、懐かしい声。

もう一度聞きたいと心の奥底から願っていた声。

「ハルトさん。女の子に対して凄く失礼な事言っている自覚はある

んですか？」

「もちろん。雫はとても可愛らしいのに地味な服しか着ないからな」

「これは黒のフォーマルスーツです。今日は……あなたが……居なくなってしまう……日だから……」

枯れ果てた筈の涙があふれ出し、止まっていた秒針が動き出した。すると温かいものに包まれる。

あの日の様に。

「あの時のままだ、何も変わらない。可愛い雫、大好きだよ」

「もう、27歳なのに酷いよ」

「嫌い？」

「なんで、そんな事を聞くの？ 10年も探したんだから」

「ゴメンね」

「責任とつてよ。責任とつてハルトのお嫁さんにして……」

「本当に良いの？ 雫、人じゃなくなってしまうんだよ」

「もう、ハルトと別れたくない。永遠に一緒に居たい」

唇に柔らかいものが触れる。

初めてのキス。

そして首筋に痛みを感じる。

初めての痛み。

首筋に血が滲む。

それは永遠の契りのしるし。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5981t/>

---

赤ワインと林檎のレアチーズケーキ

2011年8月23日14時00分発行